

財団法人 新住宅普及会 住宅建築研究所

# 研究所だより

# 4

号(昭和62年3月)

## 目次

<b>焦点</b> 白中の酒盛り——韓国の亭子と同族村落	畑 聰一	2—3
<b>研究者に聞く</b> 近代のヴァナキュラーな住居形式とイメージを運ぶ共通言語	香山壽夫+小林克弘	4—13
<b>研究と実務</b> ■ 集合住宅：設計手法と品質	間宮昭朗+坂本修造+大坪 昭	14—21
<b>随想</b> 美術を再び生活の中へ	大島清次	22—25
<b>他分野からの提言</b> ■ 江戸～明治に学ぶ東京・まちと人 21世紀への展望	小木新造+陣内秀信+内田雄造	26—34
<b>第6回住宅建築シンポジウム</b> 《いま、住様式を考える》 「茶の間」「家族の集まる部屋」を軸に現代住居の在り方を論ずる	鈴木成文	35—37
<b>図書室から</b> 世界の民家資料の収集	初見 学	38—39







## 白中の酒盛り——韓国の亭子と同族村落

畑 聰一 芝浦工業大学建築工学科助教授

韓国では、陰暦7月15日を白中<sup>ベクチュン</sup>という。この日はムラ総出でミチの清掃を行なうならわしである。全羅南道、楓山里<sup>フウサンリ</sup>の調査中に偶然この白中にぶつかった。草むしりや溝の消毒を終えた人たちは、着替えのために急ぎ帰宅し、昼までには綿や麻の白い衣服を纏い、再び亭子<sup>チンジヤ</sup>に集まってきた。いよいよ、男たち待望の「白中の酒盛り」である。地酒マッカリや焼酎が次つぎに運ばれ、何処からともなくキムチが登場する。飲み干しながら手渡す椀が何度かまわると、床と屋根だけの亭子はいきいきとした見事な空間に生まれ変わった。この熱気は作業の時間を遙かに越えて持続した。これが「ゆい」の正体だと思った。

これまでに幾度か、亭子が古老たちの日常的な生活の場として使われている場面を見てきた。ゆっくりと煙草をくゆらせる老人たちの姿に、長幼有序の伝統を垣間見ながら、今だに夏の空間として生きつつける亭子の素晴らしさを実感したものである。かつての上流住宅には屋敷内に亭子をもつものが少なくなかった。庭園のモデルとして度々引用される玉壺山房絵図には亭子が描かれているし、これぞという呼称の付された各地の遺構からも、これを屋敷に設けることが理想とされてきたことが窺える。

われわれが見た亭子は同族村落に限られ、新しい村や幾つかの姓の寄り集まるムラには存在しなかった。屋敷で果たせぬ夢を、同族集団やより日常的な門中など、父系血縁の氏族集団でようやく実現したのである。かつての寺小屋から昨今の果物や人参畑の番小屋にいたるまで、亭子に似た壁のない高床の空間が好まれているのも、同じ理由によるのであろう。

そして、白中の酒盛りには、さらに男女有別の伝統が隠されていた。同じ時刻に、女性たちは大門の近くの無窮花の陰に蓆を敷いて集まり、男たちの向こうを張って談笑に精一杯の花を咲かせていた。決してミチへはみ出さず、すれすれに敷き延べる蓆の配置に、脈打つ伝統社会の厚みさえ感じられたのである。楓山里はかつて「道川」と称し、『道川洞誌』を著した。ムラの生活を律する儒教の教えを綴ったものだが、いまだにそれが生きている。里長はわれわれが差し出した実費を一旦快く受けたのだが、そのまま別の封筒に忍ばせ何気なく返してくれた。その態度があまりに泰然としていたので、それに気づいたときは遠く楓山里を離れていた。儒教に生きづく道川の正夢であった。

(はた・そういち)

鈴木成文を主査とする研究「日本と韓国の住居の近代化過程の比較考察——住様式の持続と変容」は研究所報第13号に掲載されています。

# 近代のヴァナキュラーな住居形式と

香山 壽夫 (東京大学工学部建築学科教授) / 聞き手: 小林 克弘 (東京都立大学工学部建築工学科講師)

## 近代のヴァナキュラー

小林 先生は、このたび「田園都市の計画とその住居形式に関する研究」というテーマで、1年目はイギリス、2年目はアメリカを対象とした研究をまとめられました。2年目のアメリカのほうは、僕もお手伝いしていて、ほぼ全貌を理解しているつもりですが、まず、この研究を思い立たれた動機、まとめる際の視点等を改めてお聞きできればと思います。これまでの研究テーマなどを拝見しましても、関心はずいぶん昔からもたれていたと思うんですね。

香山 それは前からわれわれの研究室でやっている根本的な関心につながるわけで、それをしいて単純に言えば、様式論のなかで、基本的なモチーフを新しい意味づけのなかでとらえ直す、というのが設計の作業です。それをもし研究というなかでやるとすると、実際にこれまで行なわれた歴史的な行為のなかで、ある基本的なモチーフなりかたちなりが新しい意味づけのなかでどう変えられてきたかというのを見る、というのがいちばん設計に近い研究的関心だろう。

そういう関心で歴史的な本なり、これまでやられた研究をみますと、実は意外と空白だということがありますね。歴史的な研究は、いわゆるハイアートで名作を扱う。逆に近代の建築のなかでヴァナキュラーを扱うときには、一挙にプリミティブ建築とか、人類学者がみるような、ちょっと離れた、異国的な、めずらしいもの、できるだけ現在から飛び離れたところに対象を求めるといった視点をとることが多い。ですから、現在いちばん身

近なところでの、かたちの変換作用をみようとする、意外に資料がないということで、そのへんでやってきた。

そのときに、私にとっては、あるいは私達のグループにとってはやはりアメリカなりイギリスなりの資料が身近である。そこで教育を受けたり、設計や研究活動をしていたことが基礎にあるわけですね。それはフランスだって、ドイツだって面白いに違いないと思うが、そういう便利さでさしあたりイギリス、アメリカをやるということが出発点だったわけです。

ですから、イギリス、そしてアメリカはご存じのように、イギリスを最も大きなベースにして町も建物もできているわけですから、これは素直にイギリスからの変形という分析の対象になる。日本も実はそういう影響がかなり強く出ているので、日本というところでの変形も見てみたい。さらに、イギリスの影響を受けたオーストラリア、東南アジアもゆくゆくはフィールドに収めてみると、少し立体的に、ある近代のティピカルな、ポピュラーな形態要素を、それらがさまざまな状況のコンテキストのなかで、変形されてきたというのがみ



香山 壽夫

1937年東京生まれ。東大工学部、大学院修了後、ペンシルバニア大学美術学部大学院修了、アメリカ、イギリスで設計活動の後帰国。九州芸工大助教授、東大助教授を経て1986年より東大教授。1972年香山アトリエ開設。主な作品に九州芸工大、東大本郷構内の増築と再築など。

# イメージを運ぶ共通言語

えるのじゃないか。そんな構図をもっているわけです。

小林 去年、イギリスに関しては、主としてハンブステッド・ガーデン・サバーブを中心にまとめられたわけですが、そこを歴史的に扱ったものはけっこうあったと思うんですね。それをもう一度近代のヴァナキュラーという視点からどうみられるのかというのを実際のかたちに即してまとめられています。そこでの一番の関心は？……。

香山 一般的に、今日のヴァナキュラーに対する関心は、いろいろな方向があると思いますが、特に住宅に限ってみると、ヴァナキュラーな住宅というものが、いちばん人々の日常的なイメージを表出しているビルディングタイプだということ。従来の歴史的なスタイルの分類ですと、細かい詳細の様式論の分類があるわけで、たとえばイギリス、アメリカのゴシック様式だけをとっても、チューダーとか、ジャコビアン、エリザベシアンと、非常に細かく分類されている。専門家だけでなく一般の人々がそういう形で自分のスタイルを選んでいるわけで、それほど一般的なイメージとして、具体的な内容を伴って日常的に存在して

いるということですね。

ある人がある住宅のイメージをもって、それを実現したいと望む時、設計者に頼む場合は勿論のこと、プレファブメーカーの住宅を買うとか、郊外の建売を買う時でも、何かスタイルのキーになるものを手がかりにしていることに気がつく。すなわち基本的ないくつかのキーになるモチーフがあって、それがその人の望むある住居のイメージなり文化的な背景なりを乗せている。

そういうふうな関心でみたときに、19世紀の、特に郊外に大量につくられた中産階級のための住居というのは、一般の人に最もわかりやすい形で住居のイメージを操作していたのではないかと、それが個々の住居とその住居群がつくるある種の町の景観にはっきり出ているのではないかと、そういう予感があって、選んだわけですが、予想以上に明快にみえてきたということでしょうね。

小林 スタイルのキーになるモチーフということ、たとえば屋根のかたちとか、出窓とか、ポーチ、といった類いのものですね。

香山 そうです。そのときに僕たちの関心が、従来の歴史の詳細な様式分類と異なるのは、普通の人の家の主要なイメージを運ぶためのモチーフは、そんなに複雑じゃなくて、意外に単純なはずだという点です。そのぐらい単純に操作され得るものでないと、ポピュラーな言語として有効でない。ですから、様式論が詳細に分類しているものと無縁ではないわけですが、実はもっと単純明快に整理された形で形態要素としての取り出しが必要だ。それに普通の人のイメージが乗っかるということだと思っただけですね。



小林 克弘

1955年福井生まれ。  
東大工学部卒。85年東大工学部博士課程修了。  
82-84年コロンビア大学客員研究員。79年  
アモルフ設立。1986年より東京都立大学講師。  
アメリカを対象とした今回の研究(2)にも参加し  
ている。湘南台文化センターコンベンション。

子どもが絵をかく場合に端的にあらわれるような屋根のかたちとか、輪郭から突出してくる大きなベイウインドウのかたちとか、ポーチとか、基本的なテクスチャとか、全体のプランニングとの関係でいえば、道の曲がり角の部分をどう処理するかとか、入り口部分の両側をどう処理するかとか、そういういくつかのキーになるところに主要な設計的な操作が集中する。これは多くの場合、無意識のうちにそういうふうにされているというふうに解釈されますけれども、近代の大衆化社会においては、それが意識的におこなわれる。そうしたことは実際の建物においてだけでなく、この時代からは、一般向けの手引書なりパターンブックなり、そういうものでみえてくるというあたりが、面白い。

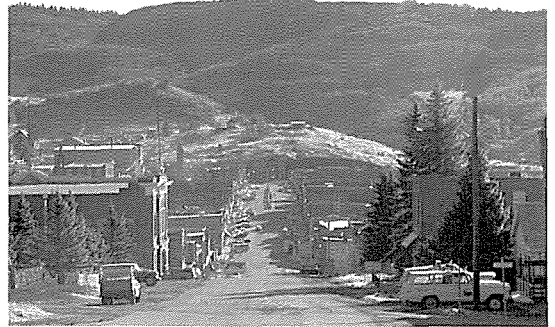
小林 この様式を成立させる要素に関して、先生はよく“ディスティンクティブ・エレメント”という言い方をされていて、スコット・ブラウンの論文だと、“スタイル・アイデンティファイヤー”という言葉になりますね。こうした概念というのは、もう一回様式というものを見直すときに、非常におもしろいような気がするんですね。

香山 そうですね。そこは重要なところだと僕も思うし、これからますますより具体的に深められなければいけないと思うんです。スコット・ブラウンもヴェンチャーもまさに設計者だったから、そういう概念が出てくる。

私も設計者ですから、個々の設計、自分の創作における有効性ということが自分のなかではもう一つあるわけですが、もう少し社会的に広げれば、ある種のアイデンティティをもった地域なり近隣なり、あるいは仲間なりをつくっていくというときに、そのへんがいちばん手がかりになるところだと思うんですね。社会が巨大になりかつ流動的になっていくと、それと相補的にあるまとまりが求められる。そういうまとまりを建築の側でどうつくり得るか、それが建築という仕事の存在意義に関わる重要なことだと思います。



コロラドのゴーストタウン（左・下とも）



この研究所の研究助成などの活動によくあらわれているように、建築の研究者は計画学の人たちが非常に多い。一方デザインの問題はそれぞれの人がやることだと放り出されていることが普通です。しかしそうしますと、結局、個人的な主観なり、個人的に無限の変化なりという方向だけが建築デザインの将来に向かって開かれる道ということになって、何か頼りどころがないんですね。しかし、一般の人にわれわれがスタイルでもって話しかけようとする、ポピュラーなスタイルで何がいちばん決定的に人に話しかけ得るか、ということで、そのへんを設計者として、少し客観的な研究なり歴史的な研究のなかから設計的な刺激的な展望をつくってみたいと思うんですね。

## ラーニング・フロム・マイニングタウンズ

小林 今年度のアメリカを対象にした研究になると、こんどはイギリス以上にテーマに関して広が

って、それはそれで非常におもしろいんですけれども、收拾がつけにくいということがありますね。

香山 イギリスとアメリカのいちばん大きな違いは、アメリカの場合には、イギリスのあとを追いかけて開発されたわけですが、ものによっては、早くも廃墟になっている。すなわち、設計は変形である、あるモチーフが変形される過程につれて、一つにはつくられていく変形の過程があるわけですが、アメリカの場合には、早くもそれが崩れて、消えていくという変形を経て残っていくというのがあるわけです。

ですから、そういう意味では、あえて、一種の抽象化というようなことになるわけで、あるかたちなり意味がむき出しにさらされてみえるというところがあって、そういう点ではむしろイギリスよりも、逆に刺激的な問題があるということが一つですね。18世紀、19世紀のイギリスが一つの変形だとすると、その変形を受けて、またアメリカが変形している。更にイギリスだけでなくフランスもあり、ドイツもあり、部分的には日本の変形もある。それはある点では、現在のポストモダンの状況にも似ている。様式を並列に並べて、自分の好きな意味に使うというのが、アメリカの建国以来、基本的にあることですから、そういう意味では、バラエティに富んでいる。がまたたちまちにして廃墟になる。この廃墟の典型がコロラドあたりのゴーストタウンですよ。

小林 そうですね。バラエティもそういう源泉のバラエティと同時に、アメリカという所は地域的なバラエティがまた、すごいでしょう。その意味でも確かにマイニングタウンは今回の、ひと月の調査旅行のなかでも……。

香山 重要な鉱脈だったところがある (笑)。

まずとにかく行っただけでおもしろい町だよ。高度3000メートルの高原の上に無人の町があり、ただ澄んだ風が吹き抜けていく。廃墟と普通いったときには、数百年なり数千年を経てはじめて廃墟になるわけだけれども、マイニングタウンはも

のによっては、まだ100年たたないのもあるわけですよ。

新しい鉱脈が発見されると、ものによっては、本当に一夜にして町ができたらしい。レッドヴィルというのは、本当にひと月ぐらいで、20万人という人口になっている。一挙に電車が走る、オペラハウスができる。ニューヨークからメトロポリタンオペラがきて公演したりなんかする。それがだめになっちゃうと、町はすぐなくなるわけですよ。

ですから、一つの町が急激につくられた、そのとき何がキーになってつくられたかというあたりが、いちばん興味を引くわけなんだけれども、1軒の家ではなくて都市ですから、どんな場合でも都市に必要とされる明快なかたちの意味なり、建築タイプの表現なりというのが要求されるわけで、それが短時間につくられただけによりむきだしな、単純な記号になっているわけですね。たとえば、華やかなご婦人まで泊まれる目抜き通りのホテルは、いちばん簡単なフランス第二帝政スタイルでいく。

小林 しかもそれを簡略化させるわけですね。

香山 そう、完全にポップアートなんです。オペラハウスですと、バロックをまた、非常に滑らかな、ポピュラー化したもので、短時間につくるといようなことですね。

ですから、そういう意味でいうと、建築のもっている記号性というか、いちばん相応しい意味の表現ということになると思いますが、つまりタウンハウスならタウンハウスらしく、華やかなオペラハウスならオペラハウスらしく、ホテルならホテルらしく、上品な家という、いかにも上品ですというふうにやるわけですね。そういうものが本当にいちばん還元された形式で実現されているということですね。

小林 いったみれば、建築言語の一つの実験場ですね。いかに簡略化しながら、そういう建物のもっているキャラクターみたいなもの、一つのスタ

イルを出せるかとか……、正統的なスタイルというものから崩して、その崩れたものがだめかというと、そうじゃない。それがまた、おもしろいところですね。

香山 そうだね。ヴェンチャーリが、“ラーニング・フロム・ラスベガス”で、ラスベガスから学べるということを描いた。ああいうネバダの砂漠の真ん中にできた街は結局、一夜か二夜過ごす観光客のためにつくられているわけですから、非常に単純な、わかりやすいシンボリズムでつくられている街で、彼はそれをあえて研究の対象にしたわけですが、僕たちの考えは、むしろラスベガスよりも、“ラーニング・フロム・ゴーストタウン”つまりゴーストタウンからより実りある分析をしようということですか。

ラスベガスはカジノとガソリンスタンドとマクドナルド。ところが、マイニングタウンは、明らかに町で、さっきいったように、場合によってはシティホールがあり、ホテルがあり、商店があって、住居部分がある。それがすべてそういうふうな還元された形式言語でつくられている。ですから、建築の形式言語というものをみるときの素材としては、ちょっとほかに考えられないぐらいおもしろい。

要するにどのくらい単純化して再構成できるかという建築の限界の問題です。ですから、このくらい自由に実際の建築ができて、それが一般のポピュラーな人の心にアピールするというあたりは、みていてまことに刺激的なところがある。

イギリスに関しては、いくつもやったことのなかの一つを集中してまとめた論文に仕上げたわけですが、本来われわれのものは拡散的にいろんなものをみるということでない、われわれの研究の目的なり意図が出ないという気持があって、アメリカに関しては、かなり多くの対象を扱い、最終的にはその半分ほどのみが、報告書にまとめられた感じかな。

小林 そうですね。マイニングタウン、セントル

イスのブレイス、正統的な郊外ということでシカゴのリバーサイド、ニューヨークのフォレストヒルズ、理想的な工業住宅地ということでプルマンとかローウェル、コーラー、レイクフォレスト、もうちょっと都市的なものとしてロウハウス、これはニューヨーク、ボストン……、それからサンフランシスコのヴィクトリアン・ハウス、随分あちこち見て廻りましたね。

## 都市と郊外

小林 今回の調査旅行を先生と御一緒に、先生の関心が郊外的なものから都市的なものに移られつつあったんじゃないかなあという印象もちょっと受けました。その点はいかがですか。



ニューヨーク郊外住宅地、フォレストヒルズ

香山 たしかにそういう感じがありますね。言ってみれば当たり前なんだけれども、いまロンドンの都心部になっている部分は、近代の初期には、郊外として開発されたわけですよ。ニューヨークでもそうで、ブルックリンは郊外として発達したけれども、いまや街の真ん中で、場合によってはスラム化が進んでいる。

ですから、日本でもって郊外というときのイメージ——都心部、山手線の内部じゃなく郊外といったとき、イギリス、アメリカを考えているときの郊外とは、決定的に違うということがあると思いますね。したがって、関心が住居、あるいは現在のわれわれが都市をつくっている住居の基本形、あるいはその集合形という問題になったとき



には、現在は郊外だけみていると、いちばんそのもとになるところが抜けていく恐れがある。僕たちは基本的には、ロンドンのテラスハウスといわれているビクトリアンの連続住居も、ニューヨークやボストン、フィラデルフィアのロウハウスもかなりわかっているつもりでやったわけですが、実は予想以上にいろいろなものがあるので、現在都心部になっている高密度な連続住居というのをもういっぺんここでみておかないと、基盤が十分じゃないと痛感した、そんなふうについていんじゃないでしょうか。

例えばニューヨークのブルックリンの場合には、ロンドンと違って、別なタイプなんですよ。ロンドンの場合には、一人の地主がまとまってやり



イギリスの郊外住宅地、ハンブステッド

ますから、まとまりを重視した開発なんだけれども、ブルックリンの場合には、街が急激に発達しているということもあるので、一挙にきれいにつくる自信がないという面が一つと、アメリカの場合には、一人一人のアイデンティティを出したいという別な要求もあったのじゃないかとわれわれは思っているのですけれども、同じ通りで一度に開発されても、1軒ずつ違うんですね。イギリスのテラスハウスの場合には、基本タイプは繰返される。違いは、ポーチの柱なり何なりで微妙に出すということですが、ブルックリンなんかは、よくみれば、平面は皆同じで、あとのスタイルは全部変えていくわけです。

小林 マンハッタンでも、たとえばブラウンスト

ーンのロウハウスなどは、全部そろえますね。あれはまたあれでみごとなものですね。

香山 そうですね。ブルックリンでは統一されているところもありますけれども、ブルックリンハイツなんかのいちばんいいところは、隣りあっても異なっているところにあるんですね。同時期に建てているときでも、一軒一軒変えている。それは隣り合っているときに、当然、共通性を保ちつつ、どうやって個別性を出すかという問題ですね。これは今日の都市の場合に、われわれが一般的にも一つのテーマだと思うんだけれども、そういうときにはブルックリンなんかは、むしろ身近な気がする。

小林 先程お話いただいた、郊外が都心になるという問題ですが、この点については、セントルイスのプレイスは、非常に興味深い例だと思いますが。

香山 その通りです。

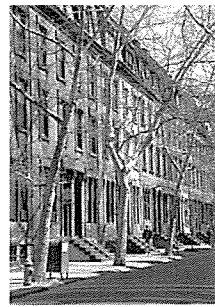
編集 プレイスについて概略を御説明願えますか。

香山 セントルイスはミズーリ州の中間、アメリカが東海岸から西へ向かって進んでいったときの中心になった町ですけれども、ここにはプレイスと呼ばれている独特の住居の集合形があるんです。簡単にいうと町中の一つのブロックの中に私道を入れまして、そのまわりに住居群をつくり、私道の入り口のみごとなゲートをつくるという形式で、それぞれが〇〇プレイスと呼ばれているわけです。それはもちろんイギリスに由来からあるテラスハウスなり、東海岸にあるロウハウスなりをもとにしてできているのですけれども、町の規則的なグリッドのなかに私道を入れて、自分の門をつくらせて、独自の領域をつくるという形式は、非常にユニークで、興味深い。

単に歴史的におもしろい例というだけじゃなくて、更に広くわれわれの関心と呼ぶのは、セントルイスでなぜそういうのができたかという背景に関係するわけです。アメリカが西部に向かって急に広がっていった、セントルイスは急激に膨張し



左/サンフランシスコのヴィクトリアンの住居群



右/フィラデルフィアのブラウン・ストーンに住居群

た。一夜にして何千人とふえるような、町が急速に激しく変っていく。しかも町のサイズそのものが、中世以来の一つのヒューマンなスケールを越えた非常に大きなものになってくるというときに、どうやってまとまりがある住居群をつくっていくかという問題があったわけですね。そういう切迫した条件に対する一つのおもしろい解答なわけですよ。これは今日の計画者なり設計者の大テーマだと思うんです。議論はいろいろされてきましたし、大規模な計画においてはそれなりにいろんな試みがなされたと思うんですけども、自然発生的にできていくなかで、むしろ下からどうやってまとまりを生み出していくかというのについては、成功して、いまなおうまく機能している例というのは、なかなか少ないということですね。

小林 想像するに、非常におもしろい都市構造ですね。

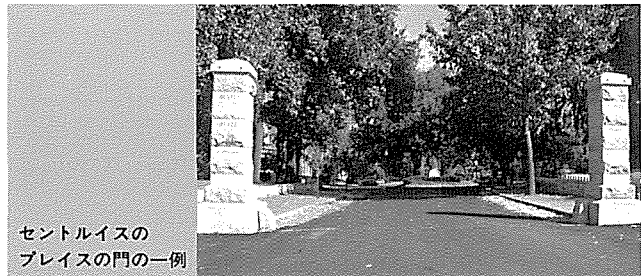
香山 プレイスは、ニュージャージーのラドバーンに影響を与えたとも言われてますし、実際に見てみると、そうだろうと思うんです。しかし、ラドバーンは、住宅公団なんかまねていますが、かなり田園的な、牧歌的な感じのほうにむしろ重点を置いてつくられています。プレイスはかなり高密度で都市的ですね。逆に都市の中心部だからこうなったと思うんですね。

これに近いのは何かというと、むしろいま残っている日本の下町、昔は山の手にもありましたけれども、袋小路です。ここは半分公的、半分私的な領域でしょう。一つのコミュニティなんですね。

僕らもいろいろ調べたんですけども、建築的なかたち以前に、お互いのなかで一種のルールがある生活、これはプレイスにもあるんです。たと

えば家の前には全部階段があるわけですけども、そこから自分の歩道の前までは毎日必ず掃除をしないとちゃいけない。それをしない人はルール違反ですね。あるプレイスでは、表に面したところには必ず二重のカーテンをさげる。二重のカーテンをさげるというのは、全体に共通の秩序をつくるということですから、それから、この家を売るときにも、全体の了解を得なければ売れない。ましてや、家以外の目的に使うことは絶対認めない。もちろん工場をつくるのはだめですけども、商売に使うのもだめだとか、ものによってはさらに、もう少し建築的なもので、セットバックのルールからはじまりまして、高さや形、時にはスタイルまで、古典主義なら古典主義にすると決めたところまであります。

ですから、これは江戸から東京までの古い住居



セントルイスのプレイスの門の一例

地に残っている秩序と、本質においては同じところではないかと思います。そういう意味では、今後とも住居のまとまりということを考えるときに、何か示唆する部分がありますね。

## 住居形式の共通言語

小林 こうした研究を踏まえて、特に設計面での応用についてお聞きしたいと思います。

まず中産階級の住宅についてですが、そういう住宅のつくり方という問題は、イギリス、アメリカ、いろんな研究を通じて出てくると思うんですね。例えばいまの建売的なもので、近年、盛んにスタイルというものが使われますが、建築家の目からみれば、かなりいい加減なスタイルがずいぶんありますね。本当に広い社会的視野に立つと、



そういう中産階級の住宅というものを建築家がどう考えて、どういう方向にもっていくべきか、そのへんをお伺いできれば……。

香山 住宅産業の関係者もそれなりにそのへんの問題を考えているだろうと思うんだけど、実際にいま家を買うときに、昔みたいに平面の使いよさという問題だけで選ばれていないのは明らかで、もう少し自分の好み、つまり自分の個性というのを出したいということがある。これはどんな家の場合にも基本的にあって、どういう形でそれに応えるかというのは、デザインの基本的な問題であるわけです。

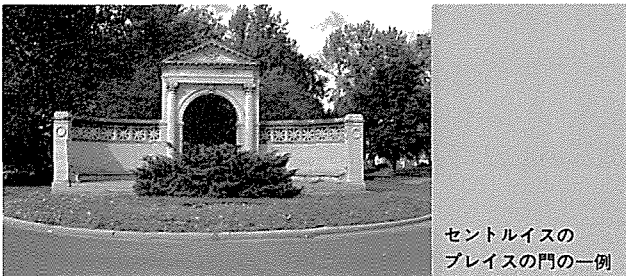
僕たちが学生のときには、住みよい間取りとかというようなことを盛んにいいましたけれども、ある基本的な状態が満たされた段階であらためて見ると、住宅のプランにそんなにバリエーションは

小さな群でどうしてもまとまりというのをもってないと人間は生きていけないですね。それは、建築的でない部分で最近ますます強くでているわけで、いま近所づき合いなり、地域的なまとまりなり、コミュニティなりということが、盛んにいわれているということは、そういうところへの欲求がたかまってきたことを意味している。今後は**建築の形態でそうした個性と共通性をどう出せるか**という問題がありますね。

小林 建築家としては、結局、売り物にするために何かのスタイルをつけるというような方向は、どこかおかしいという気はします。ただ、スタイルのなかにそういう個性と共有性をうまく統一するためのヒントというのは、ずいぶんあるような気がするわけですね。パッケージデザインではなくて何らかのスタイルを手がかりとして使うとなると、こんどは逆に平面が変わると思うんですね。たとえば、アーリーアメリカンだったら、当然こちらからアプローチがあってしかるべきところが、全然違うところからあったりとか。必ずしもそういうものに忠実である必要はないと思うんですが、もうちょっとそのへんきちっととらえ直していくと、また違った展開もあるかなという気がしますが……。

香山 そうですね。いい意味での再生というのは、より明快に形をつくれるということではあると思うんですね。

現在の様式的なアプローチというのが、変化に富んでいるようで実は意外に幅狭いなかで、ヴォキャブラリーが少ないままで、大声を出し合っていることはありますから、もう少しイメージが全体に広がれば、そんな大声を出さなくても、



セントルイスの  
ブレイスの門の一例

ないわけですね。そこから先は平たくいえば雰囲気だし、もう少し厳密に言えば、その人が自分の独自性をどこで支えられるかということになって、意外にやさしいようで、実はなかなかむずかしいということがあるんですね。現状では、かなり安手に、民家調も終わったからアーリーアメリカンだとかということで、そういう扱いは一過性で、ある種の好みの非常に表面的な部分はすくい上げるかもしれないが、もう少し住居という長く人々に仕えるものとしてはうまくいかないことは、明らかにあるわけですね。

個人作家が一人一人のクライアントのために独自のものをつくるという努力においては、いろいろな工夫が重ねられて、建築雑誌をにぎわすということで、それでいいわけですがけれども、一方で、



ロンドンのテラスハウス群（左・右とも）

それぞれの発言がしっかりできるというようなところがあるでしょう。それは単純にいうと、もう少しイメージソースを明快にすればいいことですね。そのソースというときに、無限に細かいものが果てしなくいろいろ差異があるということじゃなくて、きわだたくいくつかのキーになるものがあって、それを支えにして、人々は自分の共通性と差異というのも主張していく面があるわけですね。

たとえば最近、ある人がお互いに気が合ってまとまって一つの家をつくりたいという場合もあるわけですね。あるいは、ある地主から土地を借りて、何人かで細かく分けて家をつくりたいという場合もあるわけです。そういうときに、気は合った、一緒にやろうということまできまっても、じゃあどういふスタイルでという、いちばん肝心の具体的な空間をきめるときのことばは、いま皆無に近いですね。結局、出発点からあるところまでいって、いちばん肝心の建築の設計でかたちをつくるという段階になると、雰囲気しかしゃべれないということになるわけですね。

小林 共通言語がないという感じですね。

香山 本来、人間の連帯なり意識を支えるいちばん重要なこととしてかたちの共通なイメージというものがあるわけで、それはことばに支えられていたわけですね。19世紀の住居形式を研究している理由の一つは、その時代には少なくともこの共通言語があったからなんです。日本の現状ではほとんどそうした共通のヴォキャブラリーがないわけですね。アーリーアメリカンと盛んにいうわけですが、アーリーアメリカンといったって、スタイルの言語としては実は非常に曖昧なわけですね。あと、何があるんだといったら、ほとんどないわけですよ。民家風とか数寄屋風になる。これもなかなか難しくて民家風の飲み屋だという飲み屋にいくと、せいぜい民芸風でしょう。昔はもうちょっとあったんだけど、そのへんは再編成しなくてはいけないというところもありますね。一つ

一つの建築のイメージをもうちょっと正確にいうようにして、コミュニケーションし合えるようにするということが建築意匠論の義務だと思うんですね。そのへんまで広げたいですね。

小林 貿易黒字を何とかしろという話で、ヨーロッパの住宅メーカーが売込みの圧力をかけてきているらしいですね。一種の建売で、とにかく色々なスタイルがあるわけです。いまのままですと、そういうものが入ってくると、ますます事態は混乱すると思うんですね。そういう意味でも、しっかりした視点で整理しておかないと、みかけは豊かになっても、実質的には非常に乏しい事態になりかねないという気がします。

話は変わりますが、先生は研究室でロウハウスのプロジェクトをやっているらしいんですけども、その話を伺えますか。

香山 プロジェクトでは、基本的にいまある形態の表現上のバリエーションというのがどのぐらいにまで還元できるかというものを追求しています。従来の計画学の本流からいうと、住まい方から平面形を作っていくということだと思わなければならないんですけども、一応、そういうのから離れまして、巾6mという限界状況の宅地割を設定して、その構成の形態的な特質にはどの程度の基本的なバリエーションがあるか、それはどういうものを操作したらできるかというあたりを中心にしてやっています。

繰返しになりますけれども、従来の歴史的なヴォキャブラリーというのは大いに参考にはなるわけですが、それは歴史家が経時的な発展系列ということで決めてきたことばであって、それをそのまま使ってやっていると、むしろ不便ですね。大きさにいいますとそれを全部組直しをしてやってみたい。形態に関する合意というのも、従来の歴史的な合意、つまりルネッサンス的、バロック的というわけですが、それらを全部いっぺん自由にして組直しをしてみたい。それができれば、設計もより楽しくなり、また一般の人は、議論するときに楽しくなるということですね。



小林 そのへんはまだ、日本の場合、一般の人々の建築に対する知的なレベルというのは低いですよ。

香山 しかし一方で、いま逆に、住宅がぎりぎりになってきているだけに、関心はまた高い、ポテンシャルがあるともいえるんですよ。

小林 専門家が一般の人々に与える啓蒙的な役割ということが、真剣に考えられねばならない時が来ているような気がしますね。

ただ、建築家のことばは非常にむずかしいことが多いので、それは他分野にも必ず通用するやさしい言葉を適切に用いなければいけないと思いますね。

香山 例えばいい意味でのスタイルブックが必要でしょうね。そのスタイルブックは、子どもが絵でかけるような要素が全部載っているというものでないといけないと思うんですよ。それが本当の意味で、いい意味でポピュラーなことばということですね。

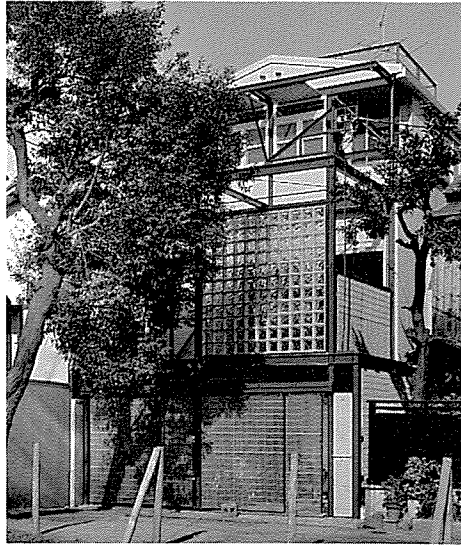
小林 今度お建てになられた先生のご自邸はいかがですか、そういう方向からみた場合に。

香山 江戸時代からの袋小路のどん詰まりのなかの一つを借地したんです。場所は千駄木なんです。江戸時代のお寺が明治のころにみんな移転させられているでしょう。そこを分割して長屋をつくった場所のひとつで、間口6m奥行12mという20坪ちょっとの細長い敷地です。この大きさは面白いことに、今日のミニ開発においても、ロンドンのテラスハウスやニューヨークのロウハウスにおいても、ひとつの最低単位です。従って、そこに今日の都市住居のプロトタイプをつくってみようと思った。平面は、これまた不思議なことに、スタディをやればやる程、日本の町屋とテラスハウスの平面のプロトタイプに近づいた。鉄骨で工業製品部材を多用して、コミュニティとプライバシーとの間の何層ものスクリーンを重ねて空間をつくっています。この住居に着手してから、その前の敷地にも数軒の町家をつくる計画を行なって

いますので、やがて、ひとつのまとまりも実現できるのかもしれない。

実際の設計が、たまたま研究と並行したわけですが、それは、研究にとっても設計にとっても、互に刺激となったわけで、今後もこういう形で仕事をしなければいけないと思っています。

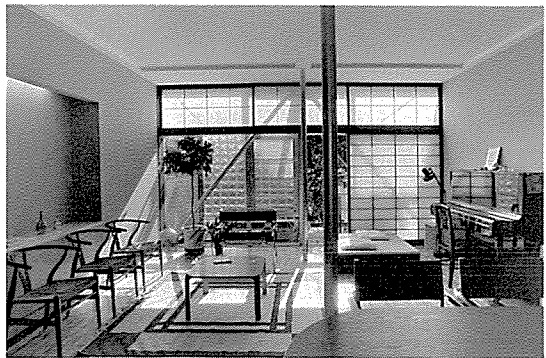
(こうやま・ひさお/こばやし・かつひろ)



間口6mの敷地に建つ正面外観



玄関前のコート



2階居間

千駄木（東京都文京区）の香山自邸（写真：RADIOUS写真工房）  
工業製品部材を多用して構成した都市住居のプロトタイプ。コミュニティとプライバシーの間に何層ものスクリーンを重ねている。

# 集合住宅：設計手法と品質

ゼネコンの設計組織として、これからの集合住宅のあり方を考える

清水建設 ■ 間宮 昭朗 + 坂本 修造 / 聞き手：大坪 昭 (当財団専務理事)

大坪 若林弘子さんの《高床式建物の源流》という本を最近読んだのですが、雲南からタイに入ったアカ族という部族が、弥生時代の日本の高床と同じ建物に住んでいるということを見つけて、建築の立場から地道に調べて居られる。古代の青銅鏡の裏に4つ出ているあれとそっくりのかたちの住居に住んでいるんですね。

彼らはだいたい10年ごとに造り替えている。いわゆる結ゆいというのかな、村の人が総出で、子供も10歳くらいから手伝っているらしいんです。その住居は、肘の長さとか、指を広げた長さとか、手を伸ばした人体寸法とか、それも、その家の主人の人体寸法で造っていく。使う人も彼ら自身だし、だからだいたいツーといえばカーということで、全部そういうシステムでやっている。セルフビルドそのものが傳承されて今日まできているらしいですね。

振り返って今の世の中を考えると、そういうふうには、造る人と使う人が同じで、造る技術も自分たちのものになっていて受け継がれていくのではなくて、使う人と造る人はもちろん違うし、造る人のなかでも、何を造ろうかということを決める人、図面を書く人、実際の仕事をする人がみんな別々になっている。こういうなかでは、情報というものがうまく伝わっていかないと、そのへんの造る気持というのが伝わらない。

そういう点からみると、ゼネコンの設計部というのは、その中の図面を書くところ、いわゆるハードを造るところまでが一応、一つの組織体になっている。ある意味では、その部分だけは情報のチャンネルの組み立て方が、ほかの形態よりも多少は恵まれていると思うんです。住宅を造る場合にいちばん大事な情報の流れというものを、清水建設の場合、どういうところに気をつけてやっているか、というようなところから話してほしいのですが……。

## TQCの手法を駆使した設計システムづくり

間宮 清水建設は昭和58年にデミング賞<sup>\*</sup>を受けましたが、その前の数年は、今、お話にあった情報の流れを良くするための道具づくり、社内の組織を越えたシステムづくりに、全社を挙げての悪戦苦闘の時代でした。

これは社会情勢も複雑になり、要求も多様化する一方、社内組織も専門化するなど、一つの住宅を造る上で今までよりも多くの情報をより正確、迅速に流し、また判断していかななくてはならない状況になったということも、ひきがねになったといえるでしょう。

それにひきかえ、昔は大工の棟梁がすべての旦那様のご意向を背負って立って、たとえば旦那様が「おい、根岸に別荘を建てたいな」というと、「へいっ」てんで、土地から何から全部さがして、自分で造って、「旦那、できました、ぜひ見てください」。旦那が行くと、「うん、よくできた」って、それは非のうちどころのないものを棟梁

\*注 (1~15)

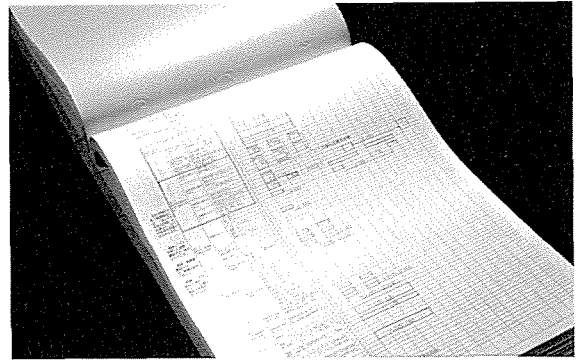
### 1 デミング賞

品質管理に業績のあった個人や企業に与えられる賞。品質管理活動の提唱者であり、わが国のQCを指導し定着させたデミング博士に因って設定された。

### 2 TQC

Total Quality Controlの略。製品の設計から流通、さらには最終使用段階まで企業活動全般を通して、総合的、全社的に品質管理を行うこと。





集合住宅の品質表の一部



間宮 昭朗

清水建設エンジニアリング  
本部 プロジェクト推進  
グループ長・部長  
前・建築設計部長



坂本 修造

清水建設設計本部生活文化  
施設担当  
建築設計部長



大坪 昭

当財団専務理事

がつくっていたということで、先程のツーカーの関係に近い状況だったと思うんです。

ところが企業として見ると、発注者も殆どが個人ではない、こっちも個人ではない。そうするとどうやらわれわれは、仮縫いがあつて、中縫いがあつて、本縫いがあつて、着てみて悪ければどんどん直して行く洋服の完全な仕立てのやり方ではなくて、イージーオーダー的な服を造ることになりがちである。そこをどうしたらこういった昔の職人の手順の心を踏まえながら、しかも無理、無駄、ムラなく、良い品質を得るためにはどうしたらよいか。このシステムの追求がTQC<sup>※2</sup>の考え方だと思うのです。

まだとても十分ではないですけど、TQC的には、要するにこれならいい品質だというものをめがけて、過去の全社の組織の経験を網羅して、発注者の意識の中にあるものないものを含めて、たぶんこういうことが要求で出てくるであろうというのを、要求品質展開という形でまずこちらで用意して待っている。テーブルを作ってしまう。それから、それはある種の機能の展開にもなっていますから、だいたいその中に発注者やユーザーの意向がつかまるようになっていく仕組みを作って、その中で、こちらへんは強調したいんだとか、このへんはあまりお望みでないな、というようなことで、処理しながら、情報としてしつらえて、一般的にいちばんわかりいい形で作ってきたということだと思うんですね。

ただ、テーブルだけ作っても、そうじゃない要求もいくつもありますから、特殊な要求については、さらにそれを、その当時は品質展開という形でどんどん物理的な設計条件に置き替えていくという作業をしながら、つかまえていく。そしてこれを前のテーブルに加えていくことを組織全体としてやっていくわけです。

## 図面を描き始める前に、まず文章化

大坪 品質展開というのを、わかりやすいとどうなんですか。

間宮 まず、素朴な生の声の発注者の要求、たとえば、「おれは静かな部屋がほしいんだ」という話があつても、一般的な発注者は建築的あるいは専門的な物理量でそれをどうしても表現できない。ただ静かな部屋で、格好よくて……という程度の話しかいただけないときに、それはいったいどういうことであろうか、静かな部屋という意味をもう少し一般的にとらえて、外から騒音が入ってこないとか、部屋の中で空調機や冷房機の音がしなくて静かであるとか、足音がしないとか、いろいろな意味の静かさがあるという一般的な事象に置き替えていく。さらに外から音が入ってこない、すなわち外部騒音を遮断するためには窓、ドア、外壁の遮音度とか、そういう建築的な言葉でそれを現わしていく。そうすると、それは外の騒音がどのくらいある場所だから、どのくらいカットすればいいとか、コトリと音がしてもいけないということであれば、スタジオみたいなものすごいものを造らなきゃいけません、まあまあ静かに

音楽を聴きたいということであれば、音楽が聴ける程度まで静かさを保ってあげるとか、そういう建築の言葉に置き替えて、さらにそれを物理量でとらえていく。たとえば遮音度〇〇である、あるいは〇〇デシベルであるというような形でやっていきますと、そのためにはどういう外壁でなければならないか、サッシュのあり方がなければならないか、そして最後には建築のブツやそのディテールにだんだんそれを置き替えていく。

もちろん特殊な場合は別ですが、一般にこのような「生の発注者の言葉<要求品質<sup>\*3</sup>>をあらかじめ標準として作ってあるテーブル<品質表<sup>\*4</sup>>を使って、展開し、設計の品質を通してむらなく間違いなく図面におとし込んでいく」のがTQCの方法論の特徴のひとつでしょう。

こうして全社の最高の技術レベルで、品質の確かさを保証していくのが理想の姿。大坪 確かにふり返って感じるのは、われわれは昔は、何か仕事があるとすぐ鉛筆を握って図面を書いたという習慣があった。今はわりあい基本的な方針から、それを展開してどこに重点を置くかというようなことを文章化して行って、最後に図面に到達する。三井所清典先生も、この「研究所だより」の対談の中で、同じようなすすめ方をしていることを言っておられました。これは今、清水建設の仕事の進め方の一つの特徴じゃないかと思うんですね。

間宮 そんなに全部がうまくいっているわけじゃないですけども、品質方針<sup>\*5</sup>とか要求品質に混ぜこぜにしながらか、一つの設計コンセプトを確立し、そして展開してはじめてかたちにしていく、というやり方をやっているわけです。ですから、言葉いい換えれば情報ははっきりしていないと、動かないというやり方ですね。

これは程度の差こそあれ、また、意識的、無意識的の違いはあれ、設計者は誰でもやっていることだと思うんです。ただ違いは、われわれの場合はそれが方針管理<sup>\*6</sup>あるいは品質保証体系<sup>\*7</sup>といったシステムの中で動いていること、そしてそれが組織の動きになり、その力を発揮させる基盤にしようとしていることですね。

大坪 それさがっきの情報のうまい伝え方、展開のしかたになっていると思うんですね。これはその意味ではTQCのもたらした、違う設計態度というのを勉強したということですね。

何百枚にも上るそういう品質表を作って、多少の経験がない人でも同じ間違いは犯さないとして、良い品質のものが造れるようにしたということは、TQCの洗礼のおかげかも知れない。しかし間宮さんのお話の中で、これも大事だ、あれも大事だと言っていたのじゃ、TQCの道具の中で振り回されちゃって何がなんだかわからなくなるので、重点を絞っていくということがTQCのもう一つの骨だと思わなければならない。そのへんのところはどうか。それともう一つは、それをもっと遡って、逆に清水建設の集合住宅なら設計はこういうところが一番大事な方針だということへ戻っていくと思うんですけども、そのへんのところは、清水建設としてどういうことを一番大事に考えているのか、あるいは、それから出発して、細かいところの重点を押えていくということになると思うんですけども、どうなんですか。

住み易い、長もちする、我慢できる、が3つの柱

坂本 間宮さんの時代に作られた当社の集合住宅の品質方針というのがありまして、これは「住み手にとって価値ある住まい」という形ですね。その中身として3つあり

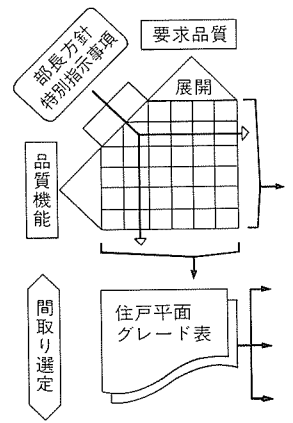


図-1 新しい住戸を創り出すしくみ

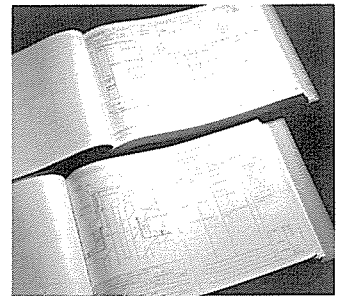
### 3 要求品質

ユーザーが求める品質、顕在的なものばかりでなく、潜在的なものも含む。性能、機能、コスト、納期、サービスなど多岐にわたる。

### 4 品質表

ユーザーあるいは発注者の生の要求品質を数次に亙ってブレイクダウンし、工学的な意味を把え、物を作る時の目標となる代用特性との関係を二元表の形で整理したもの。

### 品質表の一部

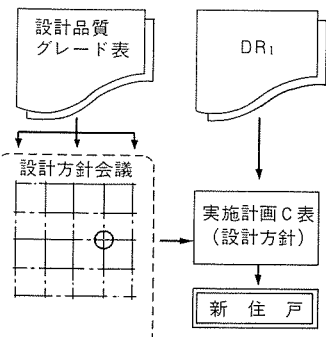


### 5 品質方針

企業などにおいてトップの経営方針にもとづいて、扱うサービス、製造物全般の品質に関して定めた最高方針。個々の製造物の部品、システムなどはさらにブレイクダウンして定める。

### 6 方針管理

企業などにおいて、全社レベルの経営計画（方針、目標、重点施策）を部門長から係員にいたるまで、筋通して伝達し、管理のもとに実施、評価、フィードバックを行ない業績の向上を図ること。



## 7 品質保証体系

品質保証を達成するために、業務の流れの時系列に従って関連部署の関与のしかた、必要な会議体、標準類、マニュアルなどを明示した一貫した仕組みをいう。

## 8 守りの品質

物をつくる時、故障や不具合を気にするあまり、その対策ばかりの品質設定を行なった製造物や態度。不具合対策は当然のこととして、むしろ他社に差別をつけるような優れた品質を旨とする「攻めの品質」の対語。

## 9 C.H.S.

### CENTURY HOUSING SYSTEM

1980年建設省における「住機能高度化推進プロジェクト」の一環。

住宅の耐用性の向上を図ることを目的に部品が交換しやすく、かつ、住生活の変化に対応して間取り可変の考え方を採り入れた住宅システム。

## 10 C.C.S.S.

### CENTER CORE SYSTEM OF SHIMIZU

1970年建設省主催の「パイロットハウス」コンペにおいて清水建設が提案した住いの考え方。

集合住宅の居住性を高めた平面計画の考え方。設備空間を中央に、居住空間を外気に面する南北に配置してある。

まして、一つは“住みやすい”,これは間宮さんが今おっしゃったような、要するに間取りの問題だとか、通風や採光があるとかということ。2つ目は“長持ちする”,これは維持管理、耐久性といったハードの問題を含めて、社会的ストックとしての住宅に通じる話です。3つ目に、当社の品質方針の非常に特徴的なところで、“住み手が自慢できる”ということ。ここが当社が今までずっと集合住宅を造ってきて、それなりの社会的評価を受けているということの根元だと思っています。

大坪 人に自慢できるというのは面白い。生物にはいわゆるハト派とタカ派というのがあって、ぶつかるとケンカしてどっちかが死ぬまでやるのがタカ派。ハト派というのはディスプレイをやるんですね。ディスプレイをやって、それで負けた方が下がっていくわけ。だから生命には異常がない。

住宅の表出ということばを使うと、飾る、あるいは玄関のところにゆとりの空間を作る、あれは一つのディスプレイ行為みたいなものだと思う。それによって相手をやっつけなくても、自分の存在を認めさせているというような、これは人間の生物としての本能の現われの一つじゃないかという気がしているんですよ。

それはそうとして、2番目の長持ちするということですが、確かに日本の住宅を横からみると、住宅の建設投資というのは先進諸国の中でトップクラスなんだけれども、ストックとしての蓄積が他よりも劣っているということは、簡単な言葉でいうと、長持ちしない住宅を今まで作ってきたということになる。

間取りが大事じゃないということではないけれども、空間の問題と、そこにもう一つ時間の問題を設計者が気をつけだしたということは、僕は非常に評価できると思うんです。

立原道造はかつて、卒論で「住みよさと住み心地よさ」を区別して使っていたけれど、住みよさというのはいわゆるファンクション、住み心地よさというのは時間の経過からくる歴史的な追体験みたいなもので、住宅のもう一つの質を決める要素である。

そういう意味では僕は、“長持ちする住宅”というのは、もっと幅を広げていけば、清水建設として一つのいいバックボーンになるし、セールスポイントにもなると思いますね。

坂本 “長持ちする”というのは、いわゆる守りの品質<sup>\*8</sup>になるかも知りませんが、住み手からいえば、これだけは満足してほしい必要な条件なんですね。

もう一つ、今大坪さんがおっしゃったように、住まい手が時間の経過で家族構成も変わってくるし、ものの考え方も変わっていくし、与えられた間取りの中で生活するというのは堪えられなくなってくる場合がありますね。その限られた広さの中で自分たちの住みたい間取りに変えられるという、可変性の問題が出てきますね。

大坪 センチュリーハウジング(CH<sup>S</sup>)<sup>\*9</sup>のときに、清水建設が提案したのは、そのへんの長持ちするという設計思想の一つのあらわれとして、「CCSS<sup>\*10</sup>+2つのポイド」という形で出てきたんでしょうね。

間宮 あのCH<sup>S</sup>に全面的に賛同し得たのは、われわれがTQCを通して検討していたものに、非常に考え方が似ていたんです。あれは建設省や多くの先生方がおつくりになった論理ですけれども、社会の優良資産を形成していくための警世の鐘として、僕は高く評価できると思っています。

## 可変住空間が今後の課題

大坪 住まいの質を、いいものを追求していく。もう一つは企業として新しい開発利益を何で得るか、これは昔から職場の合言葉にしていた「次期戦闘機を何にするか」ということになると思うのですが、センターコアシステムを作った、今度はボイドをそれに加えた。次は何を目指しているのか、差支えない範囲で聞かせて下さい。

坂本 15～6年前に当社がパイロットハウス<sup>\*11</sup>を開発したときは、今ではそれこそ「あたりまえの品質<sup>\*12</sup>」になってしまいましたが「南北の外部に面した居室に光を、風を」が重点に考えられていました。続いてプライバシーの問題や、さらに戸建感覚の導入が目標になりました。集合住宅は従来、南と北からしか光や風が入らなかったものを、ボイドを設けて、西からも東からも入れるというような形に改良されて、もうほとんど大きな品質のところ、そういう基本的な品質、あるいは間取りの問題、いわゆる住環境が平面的に造られてきた。私の代に替って今一つ造り上げたのは、今度は空間でとらえなさいいけないという考え方でですね。

空間というのは、具体的にいいますと、どうしても構造体による制約、梁や柱が出てくる。それによって間取りの制約が出てくる。そういうものを無くしていこうじゃないかという考え方で、少なくとも一つの住戸の中には梁を出さないような構造体を開発しよう、そうしたら間取りも自由に考えられるじゃないか、従来のセンターコアの考え方、プライバシーの考え方もいけるじゃないかということで、最近、比較的大きなスパンの構法に取り組んでいます。

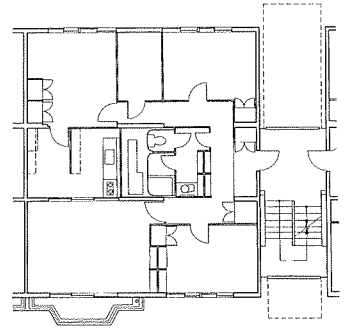
大坪 確かに日本の住宅は、間取りにとらわれ過ぎていたところがありますね。空間というものに対する取り組み方というのが今まで足りなくて、ましてさっき言った時間の問題がなおざりにされていた。空間・時間ということが売りものとしても、今後の一つの活路になるでしょう。

坂本 そうですね。そういう考え方で取り組んだのが、今回、建設省主催の都市型ハウジングシステム<sup>\*13</sup>への提案応募です。今までの平面的に増築できる集合住宅の住戸というのを越えて、空間的に増築できる住まいというのを将来考えていこうじゃないか、それも住み手が、ライフステージに合わせて「住む人自身が考えてゆく時代である」という提案をして、優秀賞の評価を受けました。法的な制約の問題があって、いろいろまだ改正していかなければいけない問題もありますけれども、21世紀に向けての都市型住居について、そういう考え方をすすめていきたいと思っています。

## お客さま（発注者）は神様か

大坪 昔、建築家はどうかということ、拙論争というものがあつた。大正期の住宅建築史上では忘れることのできないアメリカ屋にいた山本拙郎さんと、当時ライトのところの遠藤新さんが、朝日新聞で何回か論争をやったことがある。山本さんは、表現はちょっと忘れましたが、「お客さまは神様である。要するにお客さまのおっしゃったことを形にしていくのが住宅設計者である」というようなことを言って、それに対し遠藤さんは、「お客さんなんていうのは素人だ。何でも建築家が教えて、また、建築をとおしてその人を指導していくのが建築家の使命である」。争点はそんなところだったと思うんです。どっちかという、清水建設の場合は、必ずしもアメリカ屋の時代の山本さんと同じだとは言わないけれども、建設会社あるいは設計

図-2 1970年建設省主催パイロットハウスコンペでの優秀作品(C.C.S.S.)



### 11 パイロットハウス

1970年建設省主催のコンペ。清水建設はC.C.S.S.を提案して最優秀を得。

より良い住宅をより安く、大量迅速に供給するため、住宅生産に工業化技術を取り入れた試行住宅。

### 12 あたりまえの品質

それが充足されれば当たり前と受けとられ、不充足であれば不満を引きおこす品質要素。

### 13 新・都市型ハウジングシステム

1986年建設省主催の提案募集による国家プロジェクト。21世紀に対応する魅力的な都市型集合住宅と、これを実現する建築技術等のハードウェア及び供給・管理等のソフトウェアからなる新しいハウジングシステム。

### 14 魅力の品質

不充足であっても不満は残らないが、充足されれば、期待・常識以上のものとして満足を与えるような品質要素。



図-3 検見川ハウス  
(C.C.S.S. 2戸1基エレベーター方式)

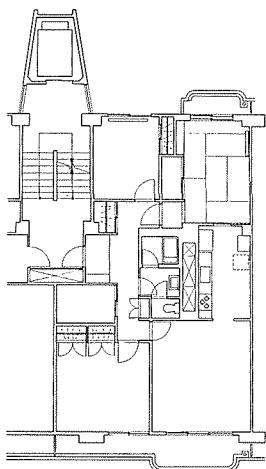


図-4 鶴巻ガーデンシティ  
(C.C.S.S. ボイドプラン)

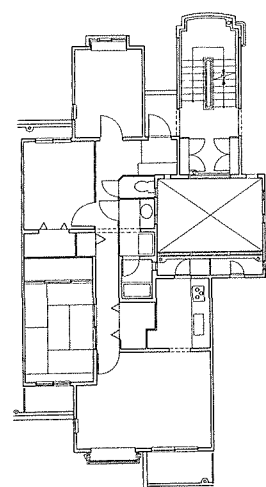
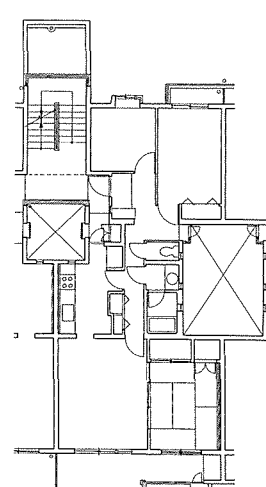


図-5 神奈川県公社座間入谷共同住宅  
(C.C.S.S. ダブルボイドプラン)



者としての社会的使命といったようなものからくる清水建設の方針の線に比べて、お客さまの方針のほうが大事なんじゃないかという気がするんだけど……。

坂本 それはいろんな面があると思うんですよね、われわれのところに引合いのある場合、清水建設というものを一応評価している人が多い。だから清水建設は何を考えたようにしているのか、どういうものをつくってくれるのか、を非常に期待しているという人が多いということになります。

私は、本来は発注者が設計者であると思っています。それをわれわれが代って作ってあげている。だから発注者の要求をまず満たしてあげる、しかしそれだけだったら誰でもいいわけです。ところが、清水建設というものを期待してくるとすれば、それに応えなければいけないという気持ちが、われわれのモラルを高めていく。悪いものは悪いとはっきり言う。そして次の提案へつながっていく、評価が出るということで、一概に“お客さまの言うとおりに”で通しているということはありません。

### 集合住宅が建築であり、商品であることの二面性

大坪 “誰がお客さまか” というのが、今の時代、非常にむづかしい。ユーザーなのか、ディベロッパーなのか……。

間宮 われわれはユーザー第一に考えています。ユーザーの満足が高めることがディベロッパーの悦びに通じると考えているからです。

お客さまは神様ですという時代が、こちらが意識することによってだんだん違ってきたというのと、もう一つは、いちばんこれはうちで大事なことは、自社でディベロッパーの役割を兼ねることが最近ふえてきたということですね。その会社の設計部隊であるということが大きく影響を与えている。ディベロッパーとしての職能を持ったということは、ディベロッパー自身の考えるべきことと、ディベロッパーが売っていくときのユーザーの気持ちをどうやってつかまえていくかという職能も兼ね備えなくてはなりません。そのへんの蓄積から、わりあい次の一步が自信を持って深く踏み出せるようになったという面もあると、僕はみていますね。

ディベロッパーがいくら歯の浮くような言葉を振り廻しているからといって、最近のディベロッパーの力量を一概に過小評価することは危険です。

坂本 僕はそこはちょっと違うのは、清水建設はものを作る、建築を造っている。ところがディベロッパーは商品を作っているんです。集合住宅というのは商品です。そこでジレンマに陥るのは、建築としていいものを造らなきゃいけないし、それが商品として売れなきゃいけない。この二面性にどう取り組んでいくかというところで、大変むづかしいところだと思うんです。僕はディベロッパー的な要素を当社が持たせると、それを独立した形になっていないと、ものを作る考え方の尖鋭さが無くなってきて、あいまいになる恐れがあると考えています。

大坪 社内における組織のあり方と、もうひとつ掘り下げ方の問題がありますね。たしかにTQCの流れに乗って、「どうして作る」HOWの問題は組織としてシステム化されてきたことは認められますが、いったい「何を作るのか」WHATの問題の掘り下げはこれからの課題でしょう。TQCの先生方が最近問題にしている「あたりまえの品質」から「期待の品質」<sup>\*14</sup>への模索は、これからの設計集団というよりゼネコン全体にとっても、尽きせぬ課題でしょうね。

## 多様化・個性化へ向かうこれからの住宅

大坪 話は飛びますけれど、この前、当財団主催で「住様式」についてのシンポジウムをやりました。その時、平井聖先生が江戸期から明治・大正の庶民住宅のプランを沢山あつめられて講演されましたが、その中でも下層武士の住宅を見ていると日本の農民の住宅がパッとそこに重なって見える訳ですね。

間宮 田の字プラン？

大坪 広間型というか田の字型というか、朝鮮半島の東側は田の字プランの流れでしょう。朝鮮も西側は中国のコロニイ的時代の影響か、四合院という中国の塙に囲まれたタイプがうかがわれますが、それが日本の奈良あたり特に寝殿造りにそのおかげを見ることができるといえる考え方もあるようです。それから最初に話した、照葉樹林の流れにのった高床の話とか。だから、日本の住様式なり住文化は、かなり何回もカルチャーショックを受けてきた。たまたま日本というのは絶海の孤島だから、それを醸成する期間があって、100年とか200年とか、あるいは1000年くらいのオーダーで日本の住宅を作ってきたと思うんです。

それで、明治の西洋文化、これも一つのショックであったことは確かだと思う。そして戦後にでてきた今の重ね建ての集合住宅も、歴史の流れから見ると、土でおおわれた竪穴住居、いわゆるムロ的なイメージの復活ともいえるか、今まで無かった形で異質のものですよね。しかも羊かんを切ったような形式から今は脱皮しようとしているわけだけれども、一方、底辺を支える家族、産業、経済の雪崩的な急激な動きがあり、ちょっと古くなったけれども多様化の時代の今は大事なことだと思うんですね。

坂本 多様化にも応えなければいけないので、いろんなものが出てくるんですけども、もう一つ、個性化の話、要するに生活のし方がみんなそれぞれ違っている。ある限られた空間かもわからないですが、自分たちが作るものに参加するという志向が最近強いですよね。言葉はおかしいけれども、DIY——ドウ・イット・ユアセルフという考え方はこれからの世の中のニーズだと思いますね。

大坪 いろんな社会環境、家族の環境、それに合わせて自分の身近な環境も少しずつ変えていく。

坂本 今までは、こういうものが今の生活のし方に合うだろう、こういうものを要求しているだろうというのをどんどん提供してきた。それが社会に受け入れられて、それなりに評価されてきたんだけど、これからは多様化に個性化がついてきますと、この提案でいかがですかというのでは、なかなか受け入れられなくなってくる。

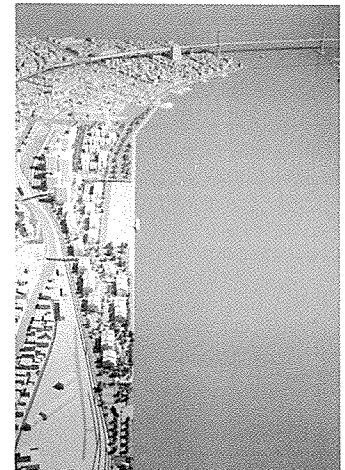
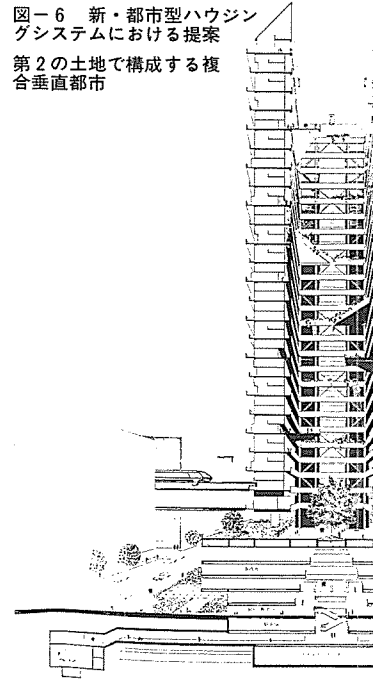
間宮 まったく無限定じゃなしに、コンクリートで仕切られた空間かもわかりませんが、そういうものを与えて、あとはさあどうぞ、あなたたちの生活のし方によってお造りになったらどうですか、と。

三井所さんがかんでいるメニュー方式、巽先生も二段階供給方式というのを出してらっしゃいますね。あの考え方が出てくるのではないかと思います。

大坪 かつてのようにお仕着せだけでは濟まなくなったことは分るけれど、ただ空間だけ与えて、あとはお勝手にでもないと思うんだよね。

坂本 それに対して手がかりを与えるということですね。その手がかりというのがあまり饒舌でもいけないし、かといって、きちっとしたところは見せなければいけない。そこをどこらへんにポイントを置くか……。

図-6 新・都市型ハウジングシステムにおける提案  
第2の土地で構成する複合垂直都市



久岐の浜ニュータウン  
(C.C.S.S.可変空間)  
2段階コンベ(第2次)最優秀案

左から、  
大坪昭当財団  
専務理事、  
間宮昭朗氏、  
坂本修造氏。



## 社会資本として整備すべきこれからの集合住宅

間宮 今、世の中は仮の世の中ととらえるならば、住まいも舞台装置みたいなものだという考え方があるんですね。テレビの「金曜日の妻たち」をよく見ていたうちの娘の言ったことは、筋書への興味よりも「お父さん、ああいう家に住んでみたい」という一言なんです。

テレビにはインテリアコーディネーターに似たスタイリスト<sup>\*15</sup>という職能がありますが、かつて歴史は支配階級の住宅が庶民のそのオピニオンリーダーであったことを教えていますが、今日ではテレビがオピニオンリーダー。ドラマの家が憧れのまよになってくるということは、逆にそういう住まい、住まい方に対する本当の意味での基礎的な教育というものが、どうしても必要になってくる。住まい方について、今基礎的な教育段階で何をどう教えているのか分かりませんが、建築学科の学生だけが学んでいくのでは、これはちょっと問題ですね。

大坪 その点で、やっぱり日本の住宅のレベルを上げるというのは、さっきのお客さまは神様だという論理は、依然として残っていくと思う。「建築主の文化水準は建築家の文化水準とおなじ位に重要だ」というギーディオンの言葉は、あまり好きな言葉ではないのですが、お客さまが良くなければ、いくら建築屋さんがかん張ったって、いいものはできない。

坂本 最近、家に対する考え方がだんだん変わってきていると思うんですね。今まで日本人というのは、一生懸命働いて自分の家を持つという考え方があったと思うけれども、最近の若い人というのは、そういうとらえ方をしなくなってきているんです。そういうことを考えていくと、僕はこれから住まいというのは、特に都市の中での住まいというのは、社会資本というような考え方で整備されていくべきではないかと考えています。所有するものから使用するものへと、住まいに対する意識も変わっていくのではないですか。

間宮 21世紀の庶民の世界は、社会資本といわれる貸家の中で、ドウ・イット・ユアセルフのセルフビルドの住戸が最後に出てくる、という図式ではないですか。

大坪 そういうところを、住宅の研究者というのはもう少しはっきりした研究をやってほしいということですか。

間宮 それが本当にいいのか悪いのかということですね。悪ければ、それを違う方向に誘導してもらいたい。

坂本 研究者と実務者の相互乗入れが必要ですね。

間宮 研究者の方にとって、提言活動が研究生命にかかわるようなことがあるかどうかは知れませんが、もしそれを論文の形で発表するのが適当でなければ、討論の中に入ってやっていただくべきだと思いますね。その討論の場が一番いいであろうと思うのは、学会の場とか何かだと思うんです。

坂本 服部岑生さんたちの集合住宅シンポジウムが、この前あえてコピーライターみたいな人を混じえたというのは、そのへんのところへの危機感からだと思うんです。まだぎくしゃくはしていますが、一緒になってものを考えましょうよ、しゃべりましょうよと、盛んにおっしゃっていますね。

そのへんで、新住宅普及会の役割を陰ながら期待していますよ。

(まみや・あきお／さかもと・しゅうぞう／おおつぼ・あきら)



超高層集合住宅スカイシティ南砂  
(計画案)

### 15 スタイリスト

服飾用語。服のデザインばかりでなく、着かたや髪形、化粧、小物までトータルに考え提案する人。転じて、定められたテーマに沿ってTVドラマなどのセットをトータルにスタイル作りする人。



時期、「美術品が家具化している」ということで、それが嘆かわしい憂うべき傾向として非難されていたことがあった。最近とんとそんな話を聞かない。高度に精神的な芸術であるべき筈の美術を家具扱いにして、デパートで大量に売り捌いているのは神聖な芸術の冒瀆である、といった類の議論なのだが、当時そうした意見に真向から異論を唱える専門家が一人もいなかった様子を見ると、それはそれで正当化されていたということになるのであろう。それが最近話題にならないというのはどういうことなのだろうか。美術の家具化現象が止んだということなのか、それとも美術の家具化現象に慣れっこになってしまっただけで、なし崩しにそうした議論が無意味化してしまったのか。あるいは、もしかして美術の家具化現象が是認されつつあるのもあろうか。

\*

美術に多少なりとも関心のある、そしてある年齢以上の人であるなら、今から10数年前の、あの怒濤のような、あるいは狂乱した「絵画ブーム」の一時期を経験している筈だ。デパートというデパートが競って、ヨーロッパの、それも特にパリの新人画家の絵を大量に仕入れ、鳴物入りで特売よろしく売捌いたものである。銀座界隈の画商は画商で、軒並み国内の有望(?)新人画家の作品を、それぞれに売出し、それがまた文字通り飛ぶように売れたの

だった。「趣味と実益を兼ねた買物」というのがその頃のキャッチ・フレーズで、事実その通り、数日前に買った新人の絵が倍の値段で売れるといったウソのような話が至るところで聞かれたのである。絵を楽しみながら、即刻面白いように金儲けができるというので、みんないっせいに狂奔したわけだが、いずれもそうした類のブームが長続きする筈もなく、オイル・ショックのあおりを食って、風船玉が破裂するように一瞬にしてしぼんでしまった。

たしかに、そうした一時のクレージーな現象は、当時の識者やある種の芸術家たちの顰蹙を買っていたものだが、今になって少し観点を変えてみると、かならずしも悪い面ばかりではなかったように思う。それまで、絵を買うということは一般大衆には無縁のもので、銀座界隈の画廊の前を横目で通り過ぎながら、金持たちが立寄る別世界だと信じ込んでいた。それが、にわかにも身近な、自分たちにも気軽に出入りできるような場所になって、美術がつまり大衆化したのである。それと、「美術品が家具化している」という非難に端的に示されている通り、手軽に手に入れた絵を、利殖はともかく、一応は各自がそれぞれに自宅のどこかに掛けて、家族ともども眺めて見ていたであろうということ。これも美術の大衆化の一面なのだが、日常生活の中で人びとがそれぞれに絵を眺めて楽しむという、従来なかった状況を新しく日本人の

## 美術を再び

大島 清次

随想



生活に普及させたという意義は大きい。それがいかにも手軽に過ぎて、あたかも応接セットや食器戸棚を買うように扱われたのではたまらぬ、という嘆きになるのであろう。その嘆きの中には、何やら知的な、もしくは有産者的特権階級の一般庶民を見下しているような響きがある。

\*

**ひ**るがえて、絵画ブームが湧き起こった背景には、第二次大戦後の日本のある特殊な住宅事情が伏在していた、と考えられなくもない。もちろん所得倍増論や列島改造論などに象徴される戦後日本の急激な経済成長が基盤にあることは確かだが、それによって、多少のゆとりを持つようになった日本人が各自マイ・ホームを建て始め、また核家族化現象も手伝って、膨大な数の新築住宅が日本国中至るところに殖えていった。そして、これまたいうまでもないことながら、そうして建造される新築住宅の内部構造や機能が、したがってまた日本人の生活の様態が、戦中・戦前のそれとは根本的に様変わりしているのである。根本的に、といったのは少々いい過ぎのきらいがあるが、しかし今ここで私が話題にしている美術とかかわる日本人の住生活という観点からすると、大層な変り様なのである。戦前・戦後の変化が、与えられたものにせよ民主主義ということで、日本人の意識の構造に深く根付いていた封建的因襲を根底から覆す風潮が急だったわけで、そのた

め住宅建築設計の上で、さまざまな新しい試みが意識的に行なわれたことは周知の通りである。もちろん完全な洋風にはなり得ず、さりとて果たして戦後の諸事民主的な風潮にふさわしい日本的な住宅建築の形式が整ったか、というと誠に寒心にたえない。その象徴的な事例が、床の間の消滅で、それにかわるべき適当なものがいまだに定着していない。というより、床の間を必要としなくなった日本人の生活様態、それはとりも直さず日本人の精神生活の変容を反映しているのであるが、そうした戦前と違った生活様態が、そのままそれに替るべきものをも必要としなくなっているらしい、ということなのだ。ただ、これまた戦前と戦後の住宅建築の違いを象徴的な例をあげていうと、とにかく建物の中に「壁」が多くなったということだろう。それも、意味不明のまま何となく洋風になったというだけのことだろうが、しかしその「壁」にいくらかでも絵を掛けようと思えば掛けられるようになったのである。ところが、私の当時の印象では、いっこうに人びとは、その「壁」に絵を掛けようとしな。絵をわが家の壁に掛けて日夜眺めて楽しむという習慣が、まるで日常生活の意識の中に存在しないのである。そこへ「絵画ブーム」が到来して、私はもしかすると、これを機会に日本人の生活に芸術が戻ってくることになるかも知れない、と大いに期待したのだった。そういった生活意識の芽生えが背景にあっ

## 生活の場へ

て、「絵画ブーム」は勃発したのかとさえ思ったのだった。しかし結果はひどいもので、ブームの激しさに反比例して、大火傷をしたサラリーマン諸氏は、ついに以後美術などには目もくれなくなってしまった。

\*

**今** 更らしく、事改めて言うまでのこともないのだが、日本人は本来伝統的に芸術的な国民なのである。芸術が生活の中に生きていて、生活がむしろ逆に芸術化されていたのである。特に江戸時代におけるそうした生活習慣が、鎖国状態の中で類例のない見事な発達を遂げて、それがいわゆるジャポニスムとして、19世紀後半からヨーロッパの美術界のみならず産業応用美術、もしくはあらゆる文化の局面にまで強い影響を与えたのである。たとえば、茶碗や湯呑みが、同時にそのまま高度に知的な芸術的鑑賞の対象となり得るような状況は、ヨーロッパ人の生活環境には信じ難い驚くべきこととして映ったし、特に床の間の存在およびその機能は、日常における日本人の美的趣味生活の典型的な現われとして讃嘆された。床の間の壁には、四季折々にふさわしい季節感溢れた、またお正月や祭礼や慶事など生活のさまざまな節目に応じた、いろいろな掛幅を掛替えして、それによって、住空間そのもののたたずまいを自然環境の変化や社会的行事の様態に、思慮深く、しかも趣味豊かに適合させていた。そうした心

の配慮を生活の中で大いに自ら楽しみつつ、それがまたそのまま一種の趣味表現となって、他人をも巻き込み、相互の趣味生活の交流に発展し、そこに連帯的な美的コミュニケーションが社会的に成立していたのだった。真に美的で平和なユートピアというべきなのだが、それはけっして贅沢でもなんでもなかったのである。それぞれの趣味判断の能力に応じ、財力に応じて、みなそれなりに生活の一環として自然な営みのうちに組み込んでいたのだった。

\*

**明** 治以降、急激な洋風化の中でも、以上のような日本人の生活感覚は、床の間の存続に象徴されるように、終戦前までは比較的日本の住空間に残っていた。それが急激に戦後消滅していつてしまうのだが、これがまた美術に反映して、床の間向きの軸装の日本画に対する需要が極端に減少してゆくこととなった。替りに油絵や、また日本画でも横物の額装に切り換えられ、日本画の描法自体も厚塗りの油彩画に近い技法が考え出されるようになった。一方また、従来の古い型式の日本画は、「床の間芸術」とか何とか軽蔑されて、次元の低い、純粹な絵画芸術には程遠い代物しろものということになってしまう。絵画にしても彫刻にしても、それが純粹に芸術として自立しているものであれば、周囲の環境と独立して、すなわち部屋の雰囲気や季節感などとはまったく無縁のまま、その存

在価値を保持し得る筈だし、またそうであってこそ真の芸術にふさわしい作品なのだという、いわゆる芸術至上主義的な美術思潮が美術界に支配的になってくる。一方ではしかし、前述の通り、戦後の生活様態の変化の中で、大部分の日本人は、そうした芸術至上主義的な芸術作品の住空間への導入を教えられることもなく、にもかかわらずかなりの壁面積を抱えて、戦前まで伝え守ってきた趣味生活の崩壊を、結果的にはなす術もなく放置してきた。

そのことは、実はもっと大事なことを私たちに気づかせてくれる。芸術至上主義はたしかにヨーロッパ近代の、ある意味で見事な芸術解釈上の理論的成果だが、実際にはその純粋な芸術作品を、彼らヨーロッパ人自身、いぜんとして彼らの居間に飾っていたのである。また如何に純粋ぶってみても、それが近代の経済主義的社会の仕組みに価値づけられていないと、つまり芸術的価値が金銭的価値に換算されないと、芸術家自身が社会的に生存不能になってしまう道理であった。いや、彼らは彼らなりに、生活空間の中で美術を楽しむ美的な趣味生活を、いっそう近代においてこそ発展させ、いわばその市民化を果していたのだ。そうした現実の趣味生活を抜きにして、曖昧な形の住宅の洋風化を試み、なおかつそれと代償に日本人本来の貴重な趣味生活を放棄してきてしまった。これは明らかに、遠くは明治以来の日本の

欧化主義に根差していようし、特に第二次大戦後の極端な日本の経済偏重主義、それにとまなう日本人の技術優先主義が、折角の日本人の美的生活のアイデンティティーを見失わせてしまった、ということになるのであろう。

\*

そのかけがえのない貴重な生活感覚の喪失を、どれだけ日本人が自覚しているのだろうか。美術にかかわる専門家、特に美術評論家にその自覚が不足しているし、さらに住宅建築の設計にかかわる建築家にもその意識が乏しいように思う。絵画やその他美術品とかかわる住空間の設計に当って、建材や家具備品ほどには、美術品についての情報がいっさい流されていないのも実情である。手近かな建築雑誌をどれでも手に取ってみて欲しい。氾濫する広告情報の中にあって、おそらく美術に関する情報は一つもないに違いない。美術ジャーナリズムも、美術業者もおかしいのである。美術が家具化してどこが悪いのであろうか。私たち日本人は、無名の工人の作った日常雑器の中からでも、あの「井戸茶碗」の例が示すように、日常の用を通じて、天下の名器を見出すほどのすぐれた美的生活感覚を培ってきたのである。何とか美術を、日本人らしく、「生活に戻す」ことは出来ないものだろうか。美術が生活に戻ったからとて、そのゆえに美術が死滅することはまぎらないのである。(おおしま・せいじ)

## 大島 清次

1924年栃木県宇都宮市生まれ。

早稲田大学文学部卒業、前栃木県立美術館館長、1986年に開館した世田谷美術館館長。

ジャポネズリー研究会理事長、美術評論家連盟常任委員、日仏美術学会理事、C I M A S (国際近代美術館委員会) 会員な

ど、内外で幅広い活動をしている。

主な著書として《ジャポニズム》(美術公論社)、《ドカ》(岩崎美術社)、《マネ》(講談社) など、翻訳書として《絵画と社会》(フラン・カステル著、岩崎美術社)、《ドーミエ》(ロベール・レイ著、美術出版社)、《文学者と美術批評》(フェスカ著、美術出版社) など多数がある。

他分野からの提言

# 江戸～明治 に学ぶ 東京・まちと人 21世紀への 展望

江戸東京学の提唱者・歴史家

**小木 新造**

(国立歴史民俗博物館教授)

聞き手：

**陣内 秀信**

(法政大学工学部建築学科助教授・建築史)

**内田 雄造**

(東洋大学工学部建築学科助教授・都市計画)

3氏ともに、江戸東京の住宅・建築・都市研究情報センター構想の一貫として当研究所が主催する、学際的な自由なサロン《江戸東京フォーラム》の世話役として、ご活躍いただいている。

内田 小木先生は“江戸東京学”の提唱者ですが、江戸東京学というのは何か、なぜいま江戸東京学なのか、というあたりからお話を伺いたと思います。

小木 まだ市民権を得たことばじゃないんですが、私のように、江戸から東京への移り行きを調べている人間にとって、明治維新の、1868年でピシャッと分けて、



それ以前は近世、それ以後は近代としますと、前後20～30年の研究がぼこっと抜けちゃう。ところが、生活という視点に立ってものをみれば、都市に住んでいる人間は、きょうからご維新だから、身も心も住まいから食いものまで全部変わるか。そんなバカなことはいわけて、やはりタテに通してみないといけいないのじゃないか。タテに通してみるとなると、いったい江戸の町というのはいつからできたかという始源意識が働きますから、相当遡って、太田道灌はともかくとして、やはり家康入府以来の歴史を丹念にずっとつなげて現在まで及ぼさないと、本当のところはわからないのじゃないかということ。

都市研究という一つの立場ですと、建築の分野では、たとえば西川幸治氏が古代・中世・近世を通してやっている。そういう立場は十分認められるんだけど、どうして現代までおりてこないのか。それも不思議なことの一つで、やはりそれには歴史を軸にして、そこに住んでいる人間の生活をタテに通してみる立場というのが絶対必要だということがひとつ。

それから、いまなぜということは、高度経済成長のころは、そういう学問の必要性は、一般の社会に受け入れられていなかったと思うんですよ。しかし現代は低成長の時代で、生活のリズムそのものが大きな時代の流れからすれば、江戸から明治に学ぶ視点というのが相当あるんですね。それから、歌舞伎や寄席のように江戸だと思い込んでいるものが実は明治ものが意外に多いとか、いろんな研究視点がそこから出てくる。そういう意味からも、江戸東京学というのは必要です。

いま東京都が江戸東京博物館というのをつくろうということで、私も、陣内さんもかかわっているんですけども、その懇談会の席上、“江戸東京学”が必要だということを強調しましたら、歴史のほうの専門家たちから、それはぜひやるべきだという話になりまして、



それで、さあ、ことばのほうが先に出て、学問はこれから体系化しなきゃならないという、まことに攻めたてられた立場にあるんです。だんだんに自分の頭のなかで熟してきていて、近々にそれは一冊活字にするつもりでおります。それをたたき台にして、皆さんでまたひとつ論議していただければありがたい。

陣内 江戸・東京と見通す学問の必要性をおっしゃると同時に、先生のご関心のなかに「都市」というのがずいぶんおありと思うんですね。江戸東京学という



のは、都市そのものですね。従来、歴史の専門の方々には都市空間とか生活の場そのもの、器としての場そのものにはあまり関心がなかったんじゃないかと思うんです。そこはやっぱり先生の学問の大きな魅力だと思うんです。

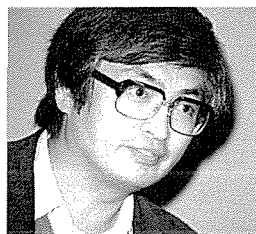
小木 私自自身が江戸っ子の後裔だと思い込んでいるんですよ。生まれ育った池上なんてところは、江戸のうちにはもちろん入らないんですが、あそこには10月12日に御会式というのがあって、魚河岸だとか青物市場の人たちが講を組んでドンツクやってくるわけですね。それであの町には江戸の情緒はきわめて濃厚に伝わっている。そこへ享保以来墓があるということになりますと、やっぱり都市に生まれた人間と田舎から出てきた人たちの意識の違いというものに、子どものときから強い関心をもっていったんですね。

そして、後年歴史をやるようになってきますと、社会経済史と地方史オンパレードで、われわれのように都市の庶民生活みたいなものに関心をもっていったって、だれも仲間はいない。だから、逆にまた江戸っ子の血が騒いで……。

陣内 歴史の研究とか都市の研究というのは、研究される方がどういう生い立ちで、どういう経験を人生に積んできたかという、そういう立脚点の違いというのが反映されるものなんじゃないかな。

### 江戸・明治を引きずっている現代東京

内田 先生の論文を読ませていただくと、一方では、オーソドックスな厳密な考察があり、他方では、その



うえに立ったロマン豊かな展開があって、私は非常に楽しく、おもしろく読ませていただいています。先生の代表作の『東京庶民生活史研究』、これは私たち建築や都市計画の分野からみても非常におもしろく、明治初期の東京の住生活、住宅事情を明らかにした数少ない研究だと思うのですが、その当時の東京はどんなだったのでしょうか。

小木 東京時代というのは、私は明治の初めから明治22～3年ぐらいまでを一応そういうふうにくくっているのです。どうしてかという、一般に文明開化東京というイメージが非常に強烈にあるわけです。近代になるとものがみんな西欧化してくる。銀座煉瓦地とか、鹿鳴館の舞踏会があるとか。それで東京が全部おおわれている感じがするんですね。これは事実だけれども、ごく一部でしかない。そこに住んでいる人間の大半は、江戸からの生活を引きずっているに違いない。その予想は、自分で調べてみて、まさに違いなかった。130万からあった人口が、75万ほどに減ります。その人口の9割5分ぐらいまでが下町に住んでいた、ということは、江戸の過密状態から全然変わっていない。じゃあ抜けたのはどこかという、全体の7割を占めていた武家地が荒れてしまって、桑畑だとか、茶畑になってしまったわけです。山の手がそうだったから、東京が今日、世界で注目される大都市になりうる要因がそこにあったということを見逃してはいけないんですけれども、下町は全然変わっていない。しかしどんな住宅に人が住んでいたのかということとはわからないんですね。しかたがないので、統計をたくさん使う手を覚えました。そうしますと、いろいろ出てくるわけですね。

いちばんいい資料としては、住宅の問題では、「火災保険一件」という書類が東京都公文書館にあったんです。東京というのがあまり火事ばかりが多いから、火災保険を強制的に掛けさせようと、政府がそういうねらいをもって下調べをしたときの調査書です。発見したとき3日ぐらい興奮して寝られなかった(笑)。1年数ヶ月も資料を当たっても住宅、住まい、建築という分類で見ていると、出てこなかったんですね。調査書で見ると、大店もあれば9尺2間の裏長屋もある、そういうものを全部平均しますと、12.7坪ぐらいのところに住んでいるんですね。これは当時の都市の住民の特に庶民の住まい方としては、少し良すぎるのではないかなと思って調べてみると、あとは個々の図面、帳簿

をみるよりしょうがない。

いくつか例が出てきまして、そのなかでいちばん大きな発見といえるのは、いま問題になっている汐留ですね。汐留のところに三角屋敷というのがありまして、幕末から明治のものであることは間違いない、明治4年の資料ですからね。そうしますと、そこには、20坪、30坪、大きい家は45坪なんていう船宿もありますけれども、何と1.75坪の独立家屋があったりする。そういうところに賃仕事をしている人だとか、駕籠屋だとか、お寿司屋さんが住んでいるんですね。寿司屋がどうしてこんなところに住んでいるんだろうと思うと、当時は天秤でかついで売った場合が多かったですから、寝るところさえあればいいわけです。「9尺2間に過ぎたるものは紅のついたる火吹竹」という小唄があるんですが、これは一人身で長屋住まいとなると、なかなかそういうところに嫁がきてくれない、きてくれないと思ひ込んでいるところへたまたま新妻がきて、うれしくてしょうがないという話ですが、まさに踵を接しながら生活している場面が下町には非常に多かったです。日本橋の本店は享保のころ、例の土蔵造り、塗り家造りにしろという御觸が出てからきれいな町並みになった。しかし、その裏側はやっぱ長屋がずっと並んでいるという状況があって、非常に混在している。世界の大都市のなかでこれほど雑居性に富んだ町というのは、ほかにない。それは現代でもそういうんじゃないでしょうか。

**内田** 確かにヨーロッパの都市にはそういうのはないでしょうね。ただ、現在のアジアの都市には、やはり似たところがありますね。

大通りに面している部分は、比較的かたい、ちゃんとした建物があって、ひとつ後ろ側のアンコの部分には、スラムが密集している。この前の江戸東京フォーラムでの陣内さんのレポートにもありましたけれども、センターがないわけですね。えらく分散している。そして土地利用は混在していますし、地区の一つひとつがどんどん変わっていきます。そういう面では東京というのは典型的なアジアの都市じゃあないかという気がしますね。

**陣内** ヨーロッパの都市というのは、中世までの都市と、ルネッサンス以後、特にバロックとか19世紀に改造された都市とでは、ずいぶん様相が違う。

中世都市は、道はぐにゃぐにゃ曲がっていますし、

一見迷路風で、整然とした町並みなんてまったくない。そこに象徴的な広場がぼんと出てくるのです。それに対し18世紀、19世紀の都市づくりというのは、全体を見通せる整然とした町並みをつくりました。特に人間のスケールよりも馬車の交通に合わせて街路をつくりましたし、同時に、見る視点が馬車の上からだから、建物の高さも高くなるし、ボリュームも大きくなる。そういう発想でできた都市というのは、やっぱりアジアの都市や東京とはえらく違うような気がしますね。

東京の大きな特徴は、19世紀の大改造を経していないということ。パリ、ウィーン、ロンドン、ローマ、みんな19世紀的な都市なんですね。東京は江戸的なものをずっと引きずってきて、現代になって高速道路を入れたり、超高層を建てたりということで、伝統的なスケール感と超近代的なもののがすごく微妙な形で混在していて、そういう意味でもヨーロッパの都市とはだいぶ違っていて、むしろいま韓国やシンガポールなど現代におけるアジアの都市がもっている共通性みたいなものもあるような気がしますね。

**小木** そこで気をつけなきゃいけないことは、いまの19世紀の話だけれども、当然、日本にも都市改造があってしかるべきで、エンデ、ベックマンをはじめとして、幻の設計図はあったわけです。それはいろんな事情でポシャった。それから、関東大震災の直後、例のビヤードのあれをいかそうと後藤新平なんか努力するけれども、これも結局予算を大幅に削られ、それからもう一度、東京が大空襲で焼けてしまう。その後も、行政府である東京都や日本政府が東京の改造を考えたわけだけれども、それが地につかないうちにすぐワツと次の住宅ができてくる。それは17世紀以来の江戸の伝統だと思うんですね。

ベルツとクララという人の日記によると、外国人からみると、日本の火事の風景というのはまことに異様なんだね。だれも悲しんでいる人がいない。むしろ喜んでいる。生きいきとしている。それはそうなんで、焼け屋という思想があって、“三年元取り”なんていうことばがある。大きな火事がくると3年ぐらい食えるんですよ。棒手振りや立ちんぼうなんかやっている人だって、1週間や10日は間違いないただ飯が食えるわけですね。借金も棒引きですからね。

12月に火事が多いというのは、12月31日、除夜の鐘が鳴るまで辛抱していれば、1年勘定をとりこない

んだから、そんないいところはないですよ。でも、そこで生活している人は、長い自分の人生を見通してというよりも、その日その日を享樂的にと解釈しないで、その日その日をきわめて充実して生きた。そういう都市市民がうじょうじょいた世界、これは武士階級もそうなんです。さっきの12.75坪の家でいちばんパーセンテージの高いのは、6割以上がとんとん葺きです。ひどいのは数は少ないんですけども紙瓦葺きなんていうのがある。そういう家に住んでいけば、これは焼けることを前提にしなきゃいけない。焼け屋ということばはまさにそれなんです。焼けているうちにすぐ地ならしをして、ニョキニョキ建ってくる。ベルツの日記には「2日の間に1000軒ぐらゐの家が建っている」と書いてあります。

そういう不思議さというものは、日本でも江戸以外はだめなんです。江戸では普通にそういう感覚がありますから、都市計画を実行する以前に、民衆は立ちどころにそこへ家を建ててしまう。しかし建つ場合に、江戸から昭和の初めまでは、圧倒的に貸家が多かった。昭和5年でも、70%ぐらゐは貸家だったんです。僕が子どものころには、斜めの貸家札というのをよく見たもんです。いまは持ち家主義でしょう、住環境に対する感覚が、確かに変わってきていると思うんですね。内田 家賃地代統制令が始まるまでは、圧倒的に貸家ですよ。

### 学際研究：グローバルな視点から状況を相対化する必要

陣内 いままであまり歴史研究では有効に使われていなかった資料に光を当てて、先生は統計資料、データをすごく活用されて、ロマン豊かに、社会の構造そのものを新しい視角で描き出すというような、それはおそらくフランスのアナル派と同じような問題意識、同じような方法でやられたと思うんですけども、それはある意味で偶然なんですか、それとも先生がそういう国際的な……。

小木 偶然なんです。アナル派があるというのは、僕は歴史家でありながら、知らなかったんですよ。東大の榊山紘一さんが向こうと接触をもっていて、そういう本をもってきたときに、愕然としたんです。まあよく似た視角をもっている。しかも、それが半世紀以上続いているんだというのは、まことに不明のいたすところで、それは語学力の欠如で、フランス語が読め

ないから、そういうものをみていなかったんですが、でも、やっぱり同じ方向をもっていて、いま世界的にそういう視角が大事だということがいわれているというのは、僕は非常にうれしいと思うんです。

歴史は底辺からというようなことがお題目みたいに唱えられるけれども、全然だめですよ。

内田 先生はいま、一方では歴史民俗博物館の、陣内さんや私が参加させていただいている都市生活研究のプロジェクトの中心メンバーですし、一方では江戸東京博物館の設立の中心としてやっておられて、学際的な研究、活躍が多いと思うんです。そういうなかで、住宅あるいは建築、都市計画、そういう分野とのつき合いも否応なしに多いと思うんですけども、われわれの分野に対してはどんなふうにお考えになっておられますか。

小木 この前も陣内さんのサントリー学芸賞受賞のお祝いの会でスピーチさせていただく機会があったんだけれども、僕ら、江戸は水の都だということをだいぶ



東京は伝統的なスケール感と超現代とが微妙に混在している……と、陣内秀信氏

前にいっているんです。ところが、われわれのおつき合いのなかで、陣内さんがそれにパッと気がついた、自分の研究のベニスと比較しながら、一つの光を与えてくれる。そういう組織力というのですか、もともと一人でやっているのよりはるかに前進がある。僕らはそのうえに乗っかって次の研究にいける。そういう点では、むしろ緊急に必要な学際領域の人が集まっていく研究のほうがいいし、現代の学問をリードするのはそれ以外にない。内田さんのおつき合いのなかで、川越の資料\*なんかみせていただく機会というのは、僕にとっては本当に垂涎ものですよ。あれは大変な資料だ。しかも、それをやっていくうちにまた……。

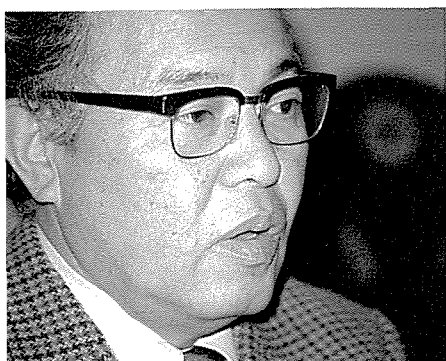
内田 こんどは先生から関連の資料とアイデアをいただいたわけですよ。

小木 そうそう。行き詰まってくると、いろんなアイデアが交換できる。これは絶対必要だと思います。

酒を飲むときに、いやな奴と飲むなというのが鉄則だけれども、学問だってそうです(笑)。いい研究と

いうのは、本当に人がわかって、しかも、それならやろうという信頼関係が出てくるときに、いい形が出るだろうと思う。

これも学問の正統派を自認している人からは怒られるんだけど、僕は一方に大変現代日本の歴史家にロマンがなすぎると感じている人間の一人です。われわれの育った時代の一つのタブーみたいなもので、統計だの数字なんかを使うのは歴史家でないといわれてきた。しかし、ある一つのことを明らかにしようとすれば手をつけざるをえなくなる。やればある程度できるということ、『東京庶民生活史研究』で実証したかったわけですね。「数字が文字を語ってくれている」と批評してくれている人がいて、これは大変僕はうれしかった。そういう意図で数字が生きるのならないと思うんです。



人間の生活をタテに通して見る立場が絶対に必要だ……と、小本新造氏

だから、私はまったく正統ではないですよ。歴史家の仲間でははずれ者もいいところで、でもはずれのほうがいま大事な研究視点をもっているんじゃないかな……。

内田 そう思いますね。私も、いままで学んできた都市計画は、常にイギリスあるいはドイツがモデルですし、あるいは都市そのものもヨーロッパの都市がモデルです。

ESCAP におられる穂坂光彦さんが指摘されているように、イギリスの場合でいえば、スラムの問題から都市計画が発展したといわれているわけですが、どうもあれはまやかしじゃないか。実際にやったのは郊外のほうが主流だった。しかも、それは植民地からきた金でやったわけで、そういうなかでイギリスの都市計画は発展してきた。日本もそれを真似てまあ直接的にはドイツの都市計画制度ですが、新しい都市計画法を1919年につくったわけですが、それを適用しようとしたが、日本の場合は既成市街地内部が大問題だった。だから結局新しい法律はほとんど実効性がなかった。今日アカデミズム内でそこらへんが総括されつつあるわけですが、私にとっては、アジ

アの都市をみるなかで初めて、もう一回日本の都市・都市計画の状況を相対化しえたところもあります。確かにもう少しグローバルな——先生はさっきアナル派の話をされておられましたが——視点から、われわれ自身の置かれている状況を相対化する必要があるように思いますね。

小本 日本の建築家が日本で建物を設計するときに、みんなヨーロッパをモデルにしたでしょう。辰野金吾をはじめ、東大の第一期生なんてみんなそうでしょう。だから、あれはむしろ先生のコンドルのほうが日本とヨーロッパとを相対化しているんですね……。

不燃化政策というのは、近代日本が負った、住宅並びに都市計画のいちばん基本だと思うんですね。どうやって実現するか。これは確かに大事なことです。煉瓦が駄目ならばじゃあコンクリートだという発想は、僕はあんまりいただけないと思う。つまり、日本人の心というのは、木や紙や壁の文化で育てられた要素がありますからね。

近世初頭の大名たちは、城という一つのハードな面は、天守閣に象徴されているけれども、住まいのほうはほとんど数寄屋ですよ。数寄屋というのは、まさに書院造りと田舎家とがミックスした形でしょう。だから、大阪城における山里丸みみたいな思想を建築のなかに具現しようとしている。そういうところにくると、現代の日本人だって非常なつろぎを感じるわけですね。ああいうゆとり、住まいのゆとりを、現代生活にもたせられるかと思ったら、それはできないと思うんだけど、機能主義一点張りでは人間を小さくしてしまうような気がしてならない……。

## ロンドンより早く独自の都市文化をもっていた江戸

陣内 日本には都市の文化がなかった、ヨーロッパにはあった、だからヨーロッパから学ぼうというふうな発想があったんじゃないかと思うんですね。ところが、冷静に考えてみますと、日本のモデルの一つになったイギリスというのは、18世紀ごろになるまでは、都市らしい都市というのはなかったのじゃないかというんですね。たとえば16世紀のロンドンというのは、田舎者がどんどん都市に集まってきて、金だけ稼いだらまた田舎へ戻っちゃう。決して都市の名門になったり、都市のなかで立派な広場や街路をつくったりという、そういう発想はなかったそうなんです。広場というコ

ンセプトも、18世紀ぐらいいならなきゃ出てこなかった。だから、イギリスはヨーロッパのなかでも相当ある意味で田舎的で、だからこそ田園都市というのは自然に出てくるわけですね。

それと比べると、日本のほうがもうちょっと早くから独自の都市の文化をもっていたんじゃないかと思うんですね。それを、自分たちの都市の文化がなかったのだからヨーロッパからすべてを学ばなきゃいけないみたいになっちゃって、そのモデルの取り入れ方がちょっと変だったのじゃないかという気はしますね。

**小木** 江戸の町というのは、家康がああ都市計画をやったというような言い方はできないんだけど、でもやっぱり、当時の絶対者がいい加減な目だったら、江戸の町はできなかったらと思うんです。いちばんいい、地震にも強い台地のところには武家屋敷があって、下町に町人を住まわせる、こういう発想は別に江戸だけじゃなくて、どこにでもある。ところが、下町を海に面してつくったということは、埋め立てれば無限に広がる可能性がある、都市膨張をちゃんと計画している。

そういうこととか、ともかく秀吉から武蔵野の江戸に決められたときに、家臣団が反対しても、家康は悠然とそこに行こうと、一返事で決定する。そこらへん、政治家の感覚のなかに都市づくりに対する一つの目があったのじゃないかと思う。これは史料がないから困るけど……。

それが明暦の大火で全部いっぺんご破算になる。そして、火災対策も含めた、広小路をもった都市をつくって行くけれども、基本は変わっていない。それが正徳ごろ一応100万都市になりますから、ひと区切りして、もういっぺん改造しようというのが享保の改革で、不燃化に対してすごい政策をやっていますね。土蔵をつくれ、塗り家をつくれ、瓦葺きにしろと、それがずっと幕末まできて、明治20年代まで続いて、こんどは30年代に市区改正で非常に大きく改造が行なわれた。市区改正は、道路幅を拡張するというようなところだけが目立っているけれども、それは軍事優先の都市計画であったといわれてもしかたがない一面をもっている。関東大震災のときに変わると思ったら、それはまたポシャってしまう。

だから、いま陣内さんがよく強調されているように、東京の町というのは、道路なんか特に、江戸と変わっ

てないところがある。これだけ変化を遂げたように表面的に見える都市のなかで、基本プランが変わっていない。そこにまた19世紀の大改造計画があったにもかかわらず、実際は改造を受けなかったという面白さがある。

## 新しい視点が必要なこれからの東京計画

**陣内** なだいなださんが、おもしろいことをいっていただんですけども、日本人というのは外国語、外来語を使うのがものすごく好きですね。店の名前とか雑誌の名前なんかみんな横文字で、しかも英語じゃなくて、フランス語、イタリア語だったり。ところが、これだけ外国語とか外国の情報が氾濫しているのに、英語を使おうとしない国民もめずらしい。この2つが奇妙に共存している。結局そうやってある種アイデンティティを保ちながら、情報をどんどん取り入れてきたのじゃないか。だから、構造は何も変わらず、エレメントだけが変わっている。

どうも東京の都市もそうなんじゃないかという気がするんですね。ストラクチャーはあまり変わっていないで、エレメントがどんどん変わっていく。

**小木** まったく僕もそうだと思う。

現代になると、情報をいままでも収集する側に回っていたのが、こんどは発信する側の基地として東京が問題になってくる。そうすると、世界中の企業が東京へといったときに、いまのような土地問題が起こってくる。いまは逆現象。

**内田** 今日は、ストラクチャー自体が変りつつあります。高度成長の時期が過ぎて低成長に入っているわけですけども、政府は、やがて日本もイギリス、アメリカのあとを追い、相対的には地盤沈下していこうと考えています。そして「国力」のあるうちにとにかく東京を国際金融情報都市として基盤整備をしたいと、ものすごく焦っているという気がしますね。それが東京湾横断道路であり、外環道路であり、圏央道であり、13号地（埋立地）の国際都心づくりですね。

**小木** そのときに、江戸から明治への移り変わりの時、あるいは関東大震災の時、そして東京大空襲のあとの、そういう感覚ではだめだと思うんですね。もっとマクロな目をもって相当いろんな知恵を総合しながら都市計画のマスタープランが必要ですね……。それには優秀な計画者を選定してやっていかないと、これからは



駄目だと思うんです。

だから僕は極端な言い方をすると、江戸の山の手を軸にもっていた武家屋敷が、東京という都市を発展させたりした一つの柔軟体であって、それは完全に昭和30年代で終わった。それから新しく変わりつつあるのに、新しい目をもっていないという不幸は、これから建築設計家あるいは都市計画者の重大な問題だと思いますね。これで変なことをやったら、東京はめちゃくちゃになってしまう。まさに東京じゅうスラム化するような現象が起きないとも限らない。

陣内 さっき先生が建物のなかにゆとりのある空間があったとおっしゃったでしょう。それは都市のなかにもいっぱいあったんですよ。たとえば山の手であれば、斜面緑地だとか、鎮守の森、武家屋敷の庭のオープンスペース、下町であれば水辺、みんな余裕のある空間で、そこでいろんな意味合いが生まれていた。全部計量化できない価値だから、それをつぶしてともかく開発、開発ということで、全部ビルドアップしていった。だから、いまそうやって安易に、消費していける隙間もない。こういう状況のなかで、どういうものをつくるかというのは、非常に重要な、むずかしい局面にきていると思いますね。

小木 17世紀初頭に返って、もういっぺん海を見直すということ。それと、いまは私、佐倉にいますでしょう。都心からいうと60キロぐらいです。いい空間ですよ。空气がいい。喉が痛くないですね。土地は都心から比べたら非常に安いし、悠々としていますね。みんなどういう志向をしているかという、目は都心へ都心へ向かっているんですね。東京へ出てくる。だから18世紀の終わりに、浅草から日本橋に出てくるには「お江戸に行く」といったのと同じような感覚があるわけですね。非常におもしろいと思う。これが50キロ圏まで広がった。100キロ圏まで見通したものを、それが衛星都市をつくれればいいのかどうかというのは、建築家の仕事だから、ぜひ考えてほしいですね。

内田 私は1960年の丹下さんの東京計画は、山の手武家屋敷から海へという形の提案だと思います。そしていまの東京計画というのは、基本的にかつての山の手に代わるものとして海へ海へという方向では動いているんです。そのなかで、かつて山の手がだめになっていったと同じメカニズムが海のほうでも行なわれているというふうに私は思いますね。

小木 それははっきりした計画を立てていかないといけませんね。

## 外来文化の受け入れ方に二面性がある日本人

陣内 明治20年ごろまで江戸的な生活空間が下町には続いてきたという指摘がありましたが、一方で、一般の庶民も、文明開化の新しいものに対しては好奇心を燃やして、新しい情報とか、ものをみにいったり、古いものを伝統的に引きずっているのと同時に、二重のメンタリティというか構造があったのじゃないかと思うんです。そういう新しいものに対する好奇心というのは、おそらく江戸時代からあったんでしょうね。

小木 ええ。江戸という都市がそうなんです。まずことばですよ。つまり、全国各地の生国からいろんな人がくる。まったく通じないですから。だから、常に新しいものに好奇心をもつこと、それは血液のなかに流れているんですね。そこが江戸人の面白さ。京都の町衆は17世紀ぐらいからあまり変化がないから、そのなかでニガリをうったように硬直化してしまう。ところが、常に意識的に柔軟な姿勢をもっているのが、江戸っ子及び東京人なんだと僕は思うんです。

ですから、新しいものを決して拒否しない。一応飛びついてみる。だけど問題は、これはまったく日本人の特性と一致すると思うんだけど、ちょうど牛の胃袋じゃないが、いやなものは吐き出しちゃう。そして自分が消化できるものは時間をかけてやっていくわけですよ。それが特徴でしょう。

たとえば五代目の尾上菊五郎が、新富座の開館のお祝いのときに、フロックコートを着ていったという有名な話が残っている。歌舞伎役者がフロックコートというのは、いまじゃ考えられないことだけれども、それがまた不思議でないような、文明開化の東京には溶け合うような雰囲気というもの東京人はもっていたと思うんですよ。

中村元さんの書いた『東洋人の思惟方式』の中に「日本人の思惟方式」という章があるんだけど、それは古代から日本人の変り身の早さを指摘している。ところが逆に、外来のものを後生大事に、原地ではなくなくなってしまったことまでちゃんと残っている。つまり外来文化の受容の形態に両面があるんです。

僕がいつも例に出すのは18世紀的テーブルマナー。田舎の高校にいくと、フィンガーボールの使い方なん

かを何千円もかけて女の子にみんな講習させるんですよ。都会の学校では少なくなってきたけれども、そんなことはヨーロッパにいったって、ナイフとフォーク1本ずつでいいわけでしょう。そういう18世紀的な食事法が日本ではある。どうしてかという、結婚式するとき必要なですよ、これが(笑)。明治二十何年の「食事法」という、ちょうど買物案内みたいな豆本があって、それに書いてある。そういうものがずっと残っているという要素と、換骨奪胎してもとのものがなくなっちゃうようなことが平気でやれるという両面がある。——木村屋のパンがそうでしょう。あれはイーストを使わないで、酒種で、しかもなかに、饅頭の原理でアンコを入れた。中をあけるといろんなものが出てくるというのは、ヨーロッパ人に食べさせたら、まじびっくりしますよ。

陣内 そうですね。日本の文化は、ただ単に日本の伝統的なものだけじゃなくて、新しいものをどんどん取り入れて、二重にも三重にもできていて、そこから選択をして、自分のTPOに合わせて使い分けられる。考えてみたら、背広をみんながきちんと着ている光景だって、もう欧米じゃあまり見ないですよ。それを日本人がいちばん律義に、毎日出勤のときに着ている。小木 田淵勇吉が、背広はヨーロッパでは労働着である。それを日本に置き換えると、股引、腹掛け、ハッピー姿、これが対応するから、股引からのほうを改良したらどうかという説を立てているんですが、だれもやらない。なぜかという、これでは上昇展開意識がそれない。下降意識になっちゃうんですよ(笑)。背広を着て、眼鏡をかけて、カメラをもったら、日本人だ、という一つのユニフォームみたいですね。

内田 制服ですよ、これは間違いなく。

小木 ところが、女のほうは改造されているんですよ。フランスの洋服メーカーは、日本人の10代後半から25歳ぐらいまでの女性を対象にしてデザインを考えるそうですからね、世界中のものの基準を……。

内田 アジアの大都市では、かつては、パリのファッションがどうだとか、ニューヨークのファッションがどうだといったけれども、いまはみんな東京のファッションなんですって。

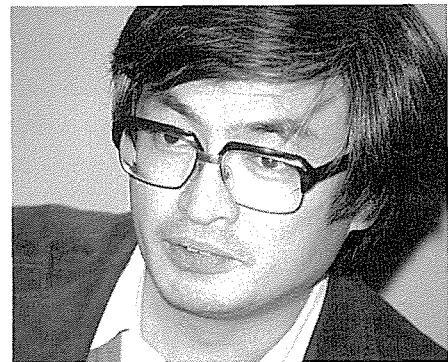
小木 東京ファッションというのは、東京で製造されているというよりも、世界中の人たちがみんな東京の人間をモデルにしながら、それを世界にばらまいてい

る。だから、いろんな意味でおもしろい要素をもっているんですね。気づかないというところもおもしろいですね。

そういういちばん基本にあるのは、東京人だけじゃなくて日本人自体が、非常に東洋人特有の、自然を自分のなかに取り入れながら共存しようとする姿勢。ところが、ヨーロッパの二元論というのは、自然との戦いのなかで行なわれてくる。その思想の基本的な違いというものが、いま日本に非常に輝かしい花を開かせているんじゃないか。それを連中が学んでくれば、とても太刀打ちできなくなる時期がすぐそこにきているというような感じがするんですがね。これからこわいですね。

文化の問題を考えると、いろんなおもしろい問題が出てくるので、少し重箱の隅をつつく研究をして

いないと、こういう発想も出てこないと思うんですよ。だけど、もういいでしょう、還暦も過ぎたんだから、少しぐらいこういうことをいっても(笑)。学問の世界



というのは非常に、……と、内田雄造氏

「あいつはあんなことをいって、大風呂敷」なんて。そんなのは間違いですよ。

## 東京ならではの利点を生かした人間のネットワークづくり

内田 先生は一方では、この研究所でやっている「江戸東京フォーラム」の呼掛人の代表でもあるわけですが、研究所の活動に対し先生の立場から、こうあってほしいとか、もっとこっちへ伸ばしていったらいいんじゃないとか、そのへんはいかがですか。

小木 建築家だけが集って、こそこそやるのは時代遅れで、いろんな人の意見を聞かなきゃいけない。それは都市に関心をもっているあらゆる分野の人たちを全部集めてやっていく。それがまず第一ですよ。そうでないと、いい知恵はわいてこない。われわれ仲間同士でも、お互いの共通項みたいなものがあって、面倒くさいところはなるべく研究から避けて行ってしまう。ところが、実は一般の民衆が歴史学に期待しているの

は、われわれが避けようとしているところ。だって生活なんてまさにそうですよ。

江戸東京フォーラムでいま何をしようとしているのか、その柱がいちばん大事なんだけれども、東京という都市そのものがいままで研究不足であったし、都市を軸にして、そこで都市の中の居住空間、都市としての諸機能、ゆとり、またコミュニケーションの場が設定できるような装置を考えなきゃいけないわけでしょう。そういうときに、いまみたいな形、いまみたいな研究費では全然駄目ですよ……(笑)。

それから江戸の都市というのは、きわめて自由、開放性があった。武士であろうと、一般の町人であろうと、正面きっていけば格式というのはあるんだけど、日常の飲んだり食ったり、だべったりというのは一緒にやっている。鈴木春信のあのすばらしい錦絵が出てくる根源には、平賀源内がまず考えられる。それから、大久保甚四郎巨川というのがいる。これは1600石どりの旗本ですよ。1600坪ぐらいの邸を構えている。鈴木春信はおそらく長屋かもうちょっといいくらいのものでしょう。こういう連中が須原屋市兵衛のところに集まって話をしたり、長崎屋にいったら世界の情勢を……。そういうことが平気で行なわれていた。葛屋重三郎のところもそうです。歌麿だとか写楽だとか、あるいは十辺舎一九だとか、太田蜀山人だとかが集まって……。そういうものをすでに江戸はもっていたわけです。そうしたサロンが日本橋を軸にしてあった。

日本橋界限は商業空間であると同時に、文化空間でもあったということですね。杉田玄白は日本橋通4丁目に住んでいます。日本橋の今の三越のところにいくのに、歩いて10分。江戸の出版の基本をつくった市兵衛という人は三越の真ん前。それから、歩いて2分ぐらいのところは長崎屋、葛屋重三郎はそこから歩いて10分ぐらい、大槻玄沢の紫蘭堂というのが歩いて15分ぐらいのところにある。みんな日本橋を軸にしている。おもしろいと思います。

陣内 つい最近までは、それぞれ会社とか、自分の組織にあまりにもしばられて、横の関係がなかったですね。みんな専門バカになっちゃうし、世界が狭くなるので、みんな欲求不満になっている。だんだん若い世代でもサロンをつくっていくという空気があって、たとえば建築とか都市開発をやっている人たちでも、公団の人と博報堂の人が一緒に研究会をやったり、そう

いうのがあちこちに出てきていますね。

そういうサロンをつくっていくうえでは、いまの東京の都市の構造とか、いろいろ魅力ある場所というのはあるんだと思いますね。だから、この都市という場、器を生かして、人間のネットワークをつくり……。

小木 それのごく庶民的なものが、江戸でいえば、町内に必ず1か所2か所あった。落語の寄席であるとか、赤提灯であるとか。赤提灯の伝統というのはいまでもあるわけでしょう。そういう人間の交流の多様性というのは、大都市ほど受け入れられやすい空間をもっている。それを生かしたらいいと思うんですよ。また、それが都市の面白さです。

陣内 いまの行政の都市づくりには、そういう発想がないですね。ともかくでっかい器をつくってそれで、仕分けをするだけなんです……。しかも、大きな空地があって、地価が安ければ、そこにつくっちゃう。もっとやわらかいまちをつくっていくうえでの、そういうサポートがあまりになっていないですね。

小木 そうだと思います。“やわらかい都市”というのは、実に重要な、東京に関するイメージを駆り立てる言葉だと思いますよ。それは単に建築面のハード、ソフトというだけじゃなしに、精神構造、生活感覚まで含めた意味で、やわらかい都市構造を江戸はもっていた。いちばん回帰したいところはそこなんじゃないですか。

陣内 いままでハードな都市づくりとか施設づくりばかりやってきていたから、いちばん本質的な、東京の都市のよさとか評価できるものをさぐっていけば、江戸に一つの行き着くところはあるみたいですね。

小木 単純回帰というのは、僕は絶対反対ですね。それでは歴史の進歩性なんてないと思うんです。

内田 きょうはどうもありがとうございました。

(おぎ・しんぞう/じんない・ひでのぶ/うちだ・ゆうぞう)

\*川越の資料——明治16年川越町連合戸長役場作成の「徴発物件書類 家屋調査 建家図」を指し、当時の川越町の町家1240戸の1/100のプラン集である。

# 「茶の間」「家族の集まる部屋」を軸に 現代住居の在り方を論ずる

当研究所主催・第6回住宅建築シンポジウムを1986年9月20日に建築会館ホールにて開催。司会を務められた鈴木成文氏に当日の様子をレポートしていただきました。

鈴木 成文 研究運営委員長（東京大学工学部建築学科教授）

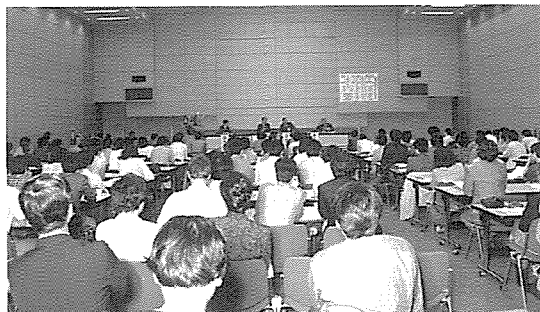
《いま、住様式を考える》というテーマで開催された今年度の住宅建築シンポジウムは、「たいへん面白かった、深く考えさせられた」という評と、「肝腎なところで突っ込みが足らずもの足りなかった、表面だけの議論に終わった」という評が相半ばした。これは住様式というテーマに伴う必然的な結果でもあろう。誰もが論ずることができ、また広く研究されているテーマであるから、日本の現代住居と住生活の姿をかなりの程度まで把えることが達成されている反面、更に一步を進めてこれからの姿を展望することがいかにむづかしいかを示すものである。

今回の講師は、平井聖氏（東京工業大学教授、建築史学）、青木正夫氏（九州大学教授、建築計画学）、栗田靖之氏（国立民族学博物館助教授、文化人類学）の三氏で、昨年度の委託論文でそれぞれ読み応えのある論文を執筆いただいている（研究所報 No. 12所載）。司会は鈴木成文（当研究所研究運営委員長）が務めた。

## 近代住宅の典型——茶の間を中心とする住居

■平井 聖氏

まず平井氏は、明治以降今日までの近代住宅で、最も重要なポイントは〈茶の間〉にあると主張する。近世の書院造あるいはその系統をひく武士住宅や明治初期の都市住宅では、玄関から見て〈座敷〉は奥に、〈次の間〉が手前にあった。しかし明治末年頃から漸次この位置関係が逆転すると同時に、かつては北側にあった〈茶の間〉が南に出て、次の間



建築会館ホールをいっぱい埋めた参加者。

が茶の間として使われるようになり、これが家の中心的な場となった。この経緯を多くのプランで丁寧に説明した後、この〈茶の間を中心とする型〉が日本の近代住宅の典型であると位置づける。そして現代の住宅でも、家族というものを考える以上、これからも茶の間というものを作り続けていかなければいけないと結論する。更に家族としての生き方の話になり、茶の間に家族一同が集まること、そして親から子へと生き方を伝えていくことが大切である、個人よりも先に家族がある、そういう家族の統合の中心として茶の間を考えよ、という論となる。平面の変遷の歴史を追うと同時に、平井氏自身の生まれ育った住宅ならびにその家庭生活、さらに現在の氏の日常生活に裏打ちされた体験として、実感を通して論じられているところが面白い。

## 近代住宅の系譜——自然的進化と建築家の提案

■青木正夫氏

次の青木氏は、明治以降の近代日本住宅の変遷の通史の叙述を試みる。これまで木村徳国氏の研究

が絶対視されていたが、明治以降の一般住宅は意外に文献記録が少ないこと、文献よりはむしろ残存する住宅現物等を発掘すべきこと、そして、現代の問題意識をもって遡ってみることが大切だと、建築計画学者的な歴史研究観をまず述べる。

論旨は、武家住宅の流れを汲む座敷の構成、即ち玄関からまず次の間に入る動線構成が、明治中期から次第に座敷直入りに変わって行く。次いで従来は座敷の床の間のうしろに位置した便所が、動線の都合から家族の側に移行する。女中と客と家族の動線分離の要求から、タテ中廊下、更にヨコ中廊下が発生する。更には日常生活の場である茶の間が、便所・浴室などと位置を交換して南面化する。こうしていわゆる<中廊下型>住宅が完成するのである。半世紀に亙る間取りの進化の動きを、動線の整理・分離という機能面からの解釈によって鮮かに説明しているところが、計画学者の歴史記述として面白い。同時にこれが自然的進化であり、庶民が作り出したものであることを強調する。

一方、建築家側としては、伊東忠太がこの中廊下型を礼讃し自邸にもとり入れているが、当時の風潮はむしろ進んだアメリカの直写であり、あるいは和洋折衷であって、必ずしも日本の生活に適合したものでない。漸く融合論の動きが出た大正期に、茶の間を洋風化した<居間中心型>が提案される。そして昭和十年代になって、庶民の間には既に定着していた中廊下型を建築家側も追認するに至り、学会における研究のモデルプランにも採用される。この流れを活写して述べた。

この近代住宅発達通史はまことに鮮かであるが、さて、〈いま、住様式を考える〉という今後についての展望は、必ずしも歯切れがよくない。戦後の公共住宅設計における<DK型>を、一時代前の居間中心型と共に建築家側の数少ない有効打と評しはするが、同時にこれは、家庭における食事とだんらんを分離して家の中心を喪失させたというマイナス面を指摘する。さらにその後の最小限住宅研究は、低い住居水準を肯定する方向に作用した。



左から鈴木成文(司会)、平井聖、青木正夫、栗田靖之の各先生。

むしろだんらんの部屋には広さこそ必要である。今後の住宅の姿として、接客要求は座敷として残るであろう、寝室としては子供室のみ確保され、夫婦寝室があいまいである、等、常識的であった。なお、日本で夫婦分離就寝が多いのは儒教の影響であろうとの推論に対しては、分離寝は儒教の伝播以前からであろうとの反論もあった。

#### 現代住宅の考現学——飾り込みの美学

■栗田靖之氏

午後には栗田氏の講演。関西・関東のアパートや独立住宅のごく普通の家庭の〈もの〉の状態と居間(LDK)の生態を、写真撮影とビデオ72時間連続撮影により調べたもの、文化人類学的手法による現代家庭の考現学的調査の紹介である。とくに生活における〈もの〉の世界に注目し、その美意識を問題としている。室内風景を沢山のスライドで紹介しながら、玄関の下駄箱の上が床の間的に飾られること、ピアノの上にはフランス人形、テレビの上には日本人形というイメージ結合があること、そのほか室内にあふれ返るものの量と、ところ狭しと飾りたてる現代の一般傾向を紹介した後、これは、それぞれの〈もの〉につきまとう過去の追憶や思い入れ、あるいは〈もの〉には靈魂が宿ると考えるアニミズムから、それらが捨てられないのであると推論する。

そして、旧来の座敷に見られる緊張感、簡素、つっぱり的美意識と、茶の間や現代のリビングルームに見られる弛緩、飾り込みの庶民的美学の、両方の傾向を日本人は二つながら持っていた、そ



のアンビバレンツに生きていたと結論づける。豊富な事例と語り口の巧みさは多くの聴衆の興味を惹きつけた。

#### 家族の集まる部屋のあり方——それは生き方の問題か ■ 討論

三つの講演をふまえて、討論は、まず<茶の間>とは何か、ということから始められた。平井氏は、茶の間を中心とする住居を見直せ、家族の統合の場を復活せよ、と言う。一方、青木氏は、今改めて復活せよと言わなくても、現代の住宅には、建売りにせよマンションにせよ個人住宅にせよ、リビングルームというものは獲得されており、既にそれは達成されている。むしろ問題はその面積であり、8畳や10畳の広さでは到底家族の集まりの生活を満足させることはできない、と主張する。また平井氏は、仮に形の上では存在していても、それが本当に家族のものになっているのかという疑問を呈する。

これをめぐって、さまざまな角度から意見が出された。一つは、現代の個室偏重の傾向が、家族の集まる生活を貧弱にしているという意見。子供室や個室が完備されるようになって、むしろ集まり部屋は圧迫あるいは軽視されるという状況が指摘される。

もう一つは客の問題であり、居間に客を迎えることを意識するがために、居間が本当に家族のためのものになっていないという状況が指摘される。

こうして問題にされる<家族の集まる部屋>の機能とは何かが問題になる。あるいは更に、そもそも住居の機能は何かが問われる。それは生活の基地だ、子供たちの教育の基地だという見解、居間は家族のひとりひとりが自由に何でもできる空間であるべきだという意見、生き方を子供に伝えていく、そういう家族の統合の場だという意見などが出される。

こうなると必然的に、家族の生き方の問題になってくる。生活像の問題になってくる。現代は、

人びとが楽な方へ楽な方へと流れてしまった。育児や家事を中心とする家庭生活を女性が守っていく生き方、そういった健全な生活のあり方を考えることが大切だという意見も出たが、いや、女性が家庭で家事・育児を受けもつなどは歴史的にもごく新しいことだ、家庭もだんらんも幻想に過ぎない、生活様式はそれぞれの家族の問題だという反論も出される。更に、文化人類学的に見れば、家庭や家族の扱え方は国により民族により違いがあり、価値観も多様である。かくあるべしと一つの生き方を推奨することなどは到底できないという栗田氏の発言は説得力があった。

したがって、茶の間あるいは家族の集まる部屋をいかに作るべきかについても、一つの答があるわけではない。要は、住様式は、家族像・生活像、つまり生き方の文化につながる問題であり、この点をはっきり意識せよということになる。

ただ、それにも拘らず、現代の住宅建設あるいは現代の家庭生活の流れを、このままに任せておいてよいのかという疑問は、依然として残るのである。今回のシンポジウムに、学生層から教授層まで、あるいは若い設計担当者クラスから部長クラスまでの参加があり、それぞれの立場からの発言があったことは、住様式の問題の関心の広さ・深さを示すものであろう。したがってこの討論も、深く考えさせられる基本問題を含んでいたと同時に、それ以上の突っ込みは得られず、具体性ある結論を望んだ人には不満も残ったというのが、全体を通じての偽らざる印象であろう。

(すずき・しげふみ)



シンポジウム後は恒例の懇親会で和やかなひとときをすごした。

# 世界の民家資料の収集

自由な発想による加工の楽しみを秘めたヨーロッパの民家資料を中心に収集を開始。

**初見 学** 図書・情報委員(東京理科大学講師)

テーマを決めて各委員が個人的に興味のある文献を収集する。当然のことながら図書館としては文献に偏りが生じるが、委員が交替することで次第にその弊害は減少されるだろう。これが図書・情報委員会発足当初の方針だったと記憶する。

個人的にということなので、恐縮だが個人的な興味について、昔から建築の図面を見ながらその空間やそこでの生活について思い巡らすのが好きだった。最近では研究の関心が住様式に向いていることもあり、いろいろな時代の、いろいろな国や地方の住居の図面を、そうした見方で眺めて楽しんでいる。

そんなこともあってこの機会に住宅の図面を集めてみたいと思った。しかしそれでは余りにも漠然としていてテーマにはならない。



ところで近年、昭和初期・大正・明治さらには江戸の町や住まいへの歴史

的関心が高まりつつある。また一方で、地域的には、先進西欧諸国とは異なる文化をもつ国々の住宅や生活様式に関心を示す研究者や建築家が増えつつある。こうした動きに共通するのは、ひとつには、時間的にも地域的にも非常に狭い視野の中でしか住まいについて考えてこなかった日本の知的状況に対する反省であろう。現在の日本の住まいをさまざまな住の在り方のなかに位置づけ相対化して眺めてみるという作業は、これからの日本の住まいを考えるうえで重要な意味をもつように思う。

日本の住様式は第2次大戦を境に大きく変容を遂げた。内田雄造・陣内秀信両委員が〔江戸・東京〕の町並み・歴史的建築・都市空間という枠組みで資料を集める方針を立てており、少なくとも戦前の東京の住宅図面はその作業のなかで集められることになる。そこでこちらは、広く世界の民家を対象とすることにした。

個人的にはイスラム文化圏や仏教文化圏などヨーロッパ以外の国々の住宅に興味があるが、資料が少なく、探すのも難しい。それらについては時間をかけて少しずつ集めることにして、とりあえず資料の豊富なヨーロッパの民家を対象に収集を始めることにした。

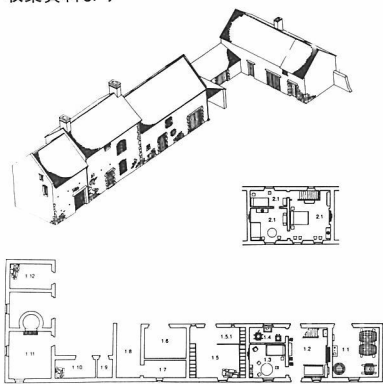
収集に当たっての第一の方針は、<sup>なま</sup>生のデータを多く紹介している文献、すなわち我々の自由な発想による加工の楽しみが残されているような文献、ということにした。余談になるが、このような文献はヨーロッパでは実によく整えられている。オペラハウスもよいが、こうした文化的資料の蓄積整備にもそろそろ日が向けられてもよいのではないか。



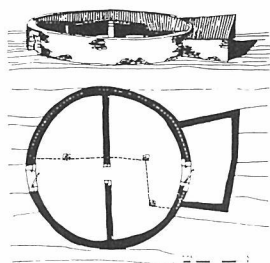
ここで、このような方針で集め始めた文献を紹介したい。どのシリーズも地方毎に資料が集められている。そして各地方の事例紹介の前に気候風土・地理・歴史的背景・構法・類型・時代的変化等の概説がまとめられている。具体的な民家事例については、シリーズによって扱いは若干異なるが、実測図面と写真を中心に紹介されており、これに各種データやコメントが付記されている。なお右頁の巻数後の括弧内の数字は入荷



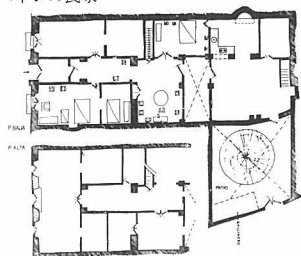
収集資料の一部



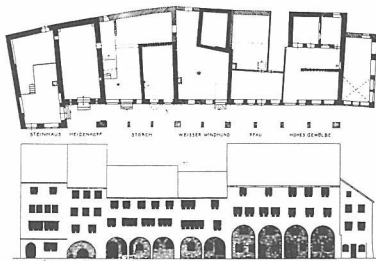
フランスの民家



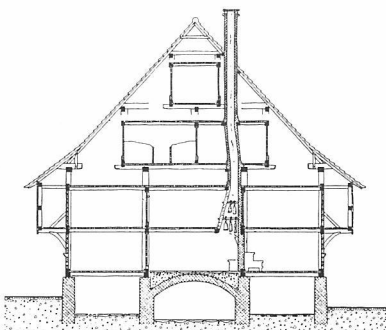
スペインの民家



スペインの民家



ドイツの民家



スイスの民家

済の冊数を示す。

● **L'architecture rurale française**

全25巻(15)

フランス全土を22の地方に分けて民家を収録。1例毎、屋敷配置や集落の図面を記載し、建物については平面・立面・断面のほかアイソメで全体を表現し、必要に応じて構法やディテールを紹介。丁寧なコメントが添えられている。

● **Das Deutsche Bürgerhaus**

現在31冊

ドイツ各地方の民家だけでなく都市の成り立ちや都市住居についても紹介している。

● **Die Bauernhäuser der Schweiz**

全9巻(7)

スイス各地方の民家とともに、集落や室内装飾も紹介。

● **Arquitectura Popular Española**

全5巻(3)

1・2巻はスペイン民家の概説。3巻以降で地方別に民家の事例を豊富な写真とともに紹介。

● **Itinerarios de Arquitectura**

**Popular Española** 全5巻(5)

地域別にスペイン民家を集落単位で紹介。旅行のガイドにもよい。

● **Greek Traditional Architecture**

全8巻(2)

ギリシアの民家と集落

● **La Casa Contadina in**

**Lombardia** 全4巻(未入荷)

イタリア北部の民家

● **Architecture Rural de Wallonie**

全3巻(未入荷)

ベルギー内部ワロン地方の民家

イギリスについてはシリーズとしてまとまったものが見当たらないので、今後単行本を中心に各地方の民家を

扱った文献を集める予定。またアフリカ、中近東、アジア、南アメリカ等の国々の民家資料については、ある程度資料がまとまった段階で紹介したい。

なお今後は、ハードな建築だけでなく、各国の住様式をささえているソフトな生活そのものに関する資料も集めたいと考えている。

● さて、これらの資料をどう料理するか。眺めるだけでも刺激に富んだ楽しい資料です。膨大な事例を縦、横、斜めに並べてみることで、時代的・地域的・文化的背景と住まいの在り様の関係が見えてくるかも知れません。興味のある方はぜひ腕を振るってみて下さい。なお最後になりますが、よい資料を御存知の方は図書室宛お知らせ下さるようお願いいたします。(はつみ・まなぶ)

あとがき

研究所だより0号を59年7月に発刊して早足掛け3年になる。回を重ねるに従い、形が定まってきたと思う。しかしその間、いろいろと方針も変更された訳だが、やはり一つの形が出来てしまうと、なかなか踏み破れないものだと痛感する。今後も『研究者に聞く』や『他分野からの提言』を中心に進めていくことになると思う。なお、希望として、読者の方からのご批判、ご意見などを頂いて掲載するページを加えたいと思っている。なにとぞ忌憚のないご意見をお寄せ下さることをお願い申し上げたい。(海野 勉)

(財)新住宅普及会は昭和23年、故清水康雄氏(当時清水建設社長)が、私財の一部を基金として設立された公益法人であります。

住居に関わる研究助成を事業の中心とし、また図書室・セミナー室等を公開し、研究普及活動を行っております。

刊行物

「住宅建築研究所報」 年1回刊行  
「研究所だより」 年2回刊行  
「研究報告書」 随時刊行



